

研究報告

大岡芦ノ尻道祖神の系譜 —— 山間畑作地帯における道祖神信仰とワラ文化 ——

宮下 健司

はじめに

長野市大岡芦ノ尻の道祖神は夢想的な造形とともに、ワラをいったん加工した注連縄の意匠の力強さとたくましさで、一度見たら忘れることのできない強い印象を与え、見る人の心をとらえるものがある(図1)。一九九七年(平成九)八月一日に県の無形民俗文化財に指定され、一九九八年(平成一〇)の長野冬季オリンピックの開会式に登場して以来、その造形美は日本ばかりか世界にも知られるようになった。

この道祖神について、発見者の森島稔は当初アニミズムに基づく原初的な信仰から始まったと考えたが、その具体的な成立には言及していない^①。人形道祖神を追いかけていた神野善治は「先代の石塔が毎年焼かれて形が崩れたため、明治初年になって現在の石塔が新造されたことも想定できる。石塔を新造したときに、塔そのものを焼くことをやめて、石塔を藁の神面で覆うようにしたのではなかったか」として、人形道祖神と道祖神石像をつなぐ事例と考えた^②。しかし、先代の道祖神は右隣にある小さな祠形の道祖神で、一度も火を受けた形跡がなく、注連縄で大切に小屋がけされているのである。細井雄次郎は森島、神野の研究を丁寧に検証しながら、このワラの道祖神は大岡地域で春の彼岸の中日におこなわれているセイゾーボーと呼ばれる疫病神送りのワラ人形の影響で生まれたのではないかと考えた^③。しかし、このワラ人形は大岡ばかりではなく、二月八日の事八日や春の彼岸中日に疫病神を送るワラ人形として、松本の入山辺地区や明科の柏尾・清水地区、筑北村本城立川にもあり、この地域の道祖神信仰とは性格をまったく



図1 長野市大岡芦ノ尻の人形道祖神



異にするものである。ワラで人形をつくることと、正月飾りにつかった注連縄を部品として道祖神碑に用いることを同一レベルでは考えられないのである。筆者は一九八〇年(昭和五五)に長野市若穂高岡の道祖神祭り、一九八二年(昭和五七)には長野市塩崎越の道祖神祭りの復活に関わり、木やワラでつくられた人形道祖神の全国的な分布等を調査する機会を得た。その中で常に気になっていたのが芦ノ尻の人形道祖神の系譜関係であった。芦ノ尻例は長野市塩崎の越や平を南限として新潟県から東北地方にかけて分布するワラ人形の道祖神とは系譜関係がたどれず、作り方や形態がまったく異なる独自な人形道祖神だったからである^④。

以来この問題を解明するために芦ノ尻の周辺地域の道祖神碑や道祖神祭りを調査してきた。この地域は江戸時代には松本藩領と松代藩領の境が接し、明治以降は北安曇郡・上水内郡・更級郡・東筑摩郡の四郡の境に位置してきた。新第三紀層の地すべり地帯にある山間地の畑作地帯で、かつては麦・大豆・煙草・麻・養蚕で栄えた地域であるという風土の共通性も有している。松本から安曇野にかけては千体を超える道祖神碑があり、しかも大きな花

崗岩の石に男女像を刻んだ見事な双体像が多いことから、「安曇野は道祖神のふるさと」、あるいは「松本平から安曇野にかけての地方ほど道祖神信仰の盛んな所はない」といわれてきた。

その東の隣接地である山間の畑作地帯が本稿が取り上げる道祖神信仰の舞台である。この地域には地質構造との関係で砂岩製の道祖神碑が多く、風化の激しい砂岩製の道祖神碑を風雨から守るために、注連縄やヤスで屋根を覆ったり、小屋がけする地域であることも判明した。

この地域の道祖神信仰を支えた山間地の畑作地帯とそのワラ文化の中に、芦ノ尻の人形道祖神のような特徴的な道祖神飾りを生み出した要素があると考え、江戸時代から現在までの生業や生活の変貌を追いつながら、自然（地形・地質）・歴史・民俗という総合的な視点からその系譜関係を描き出してみたい。

この地域は江戸時代には山間地の畑作地域ゆえに集落や人口が拡大したが、戦後の高度経済成長の前後から過疎化の進行が激しく、伝統的な道祖神信仰をはじめとする年中行事や民間信仰が消えつつある。生物でいえば絶滅危惧種に相当するといってもよい貴重な道祖神信仰の現時点での姿を、記録として留めておくことも本稿のもう一つの目的である。

1 中山山地と犀川丘陵地の風土

(1) 地理的環境

安曇平と犀川にはさまれた犀川西岸の山地は「中山山地」と呼ばれている。この山地は標高六〇〇～一〇〇〇級の丘陵性山地で、明科の押野崎から生坂・池田・八坂・美麻を経て小谷村まで続いている。新生代新第三紀（二〇〇〇万～二〇〇万年前）の時代にフォッサマグナの海に堆積した泥・砂・礫が隆起した褶曲山地の西縁部に当たる。中央に中山断層が走りこの断層を境にして東側と西側の地形・地質・土地利用が著しく相違し、東側は地層の著しく乱れた犀川擾乱帯と呼ばれる地域で、その大半は泥岩や砂岩層となっている。この地域では便宜的に中山断層より西側を大穴山山地および大峯山列、東側を犀川丘陵地と呼んでいる。

池田町の中山山地東部は中山断層と犀川断層にはさまれた地域で、犀川の西側に広津・陸郷がある。この山地は北にいくに従い高さを増し、大町市八坂との境にある上手山（九〇〇級）が最高所で、山稜まで耕地化されて「耕して天に至る」というような山村風景を呈している。その北に接する八坂は村内にまとまった平地や中心地がない県内唯一の村でもある。

犀川丘陵地は明科の下押野から塩川原・小泉・池田町陸郷・生坂村・八坂・信州新町へと続いている。ここも北に向かって高さを幾分増すが、全般的には起伏が少なく、標高六〇〇～八五〇級におよぶ比較的平坦な丘陵地帯で、集落と傾斜地の畑地として利用されてきた。

犀川に沿う豊科田沢から明科を経て生坂村山清路にかけての両岸には二～三段の河岸段丘が発達し、集落や水田、畑に利用されている。段丘単位ごとに孤立性が強く、江戸時代は日岐村・草尾村・宇留賀村のような小さな村むらに分かれていた。犀川東岸の生坂山地は筑北村坂北との境にある岩殿山（二〇七七・五級）が最高所である。犀川流域は川手地域とも呼ばれている。

山清路と差切峠は急傾斜した小川層の軟らかい泥岩と比較的硬い砂岩・礫岩が互層となり、泥岩部分は浸食され、砂岩・礫岩の岩盤が天空に突出した雄大なV字谷の狭い谷となっている。その下を犀川と麻績川が流れる溪流美から奇景・名勝の地となっており、江戸末期から明治にかけては文人墨客が訪れ、「安筑両郡の境、嶮岨巖壁両岸に聳え、春夏秋冬山水眺望の景勝なり」といわれるように、古くから犀川流域では高名な景勝地であった。

美麻から八坂を経て山清路で犀川に合流する金熊川の八坂分、信州新町左右の当信川支流の濁沢には一〇〇級の落差をもつ不動滝や懸谷、河床にはポットホールもみられる。

大岡では村の中央を南の市後沢・芦ノ尻から北の樺内を通り池田に通じる県道丸子信州新町線を挟んで、東側は聖山の火山活動で堆積岩を貫いて噴出した火山岩の安山岩・玄武岩で、西側は海底堆積の砂岩・泥岩・凝灰岩である。

麻績・坂北は更級郡と小県郡と境を接する東筑摩郡の最北端に位置し、筑北三

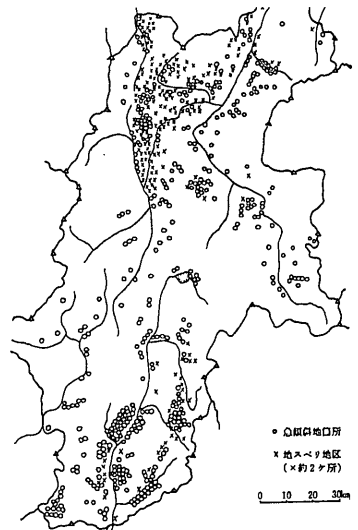


図2 急傾斜地・地すべり箇所分布図
(山口1985より)

山の聖山・冠着山・四阿屋山に囲まれた谷底平野の盆地を流れる麻績川が山清路で犀川に合流することによって、この地域と結びついている。

中山山地・犀川丘陵地とも全般的に軟弱な地盤で碎けやすく磨滅しやすい砂岩、泥岩が風化して粘土化し、水分を含むとぬかるみ、地すべりの発生しやすい岩質で、この地域は地すべり地域(図2)に指定されている。また、急峻な山地の狭い谷間を流れる急流は集中豪雨による鉄砲水、洪水時には荒川となるため、沢の各所に砂防堰堤を築いて土砂流出を防いでいる。さらに、北部の八坂・美麻は冬季に積雪も多く、雪崩も発生する。

この地域の集落立地は、山嶺や緩傾斜地、山間地、幅を広げた溪流沿いに小集落が散在している。傾斜地の畑は風化しやすい砂質泥岩・砂岩のために、耕起によって容易に耕土となり、畝を等高線沿いにつくって、麦・大小豆・たばこ・桑などが栽培されてきたが、土壌が膠質な粘土のために干害には極めて弱いという特徴がある。新第三紀層には山清路付近では亜炭、生坂の池沢山などからは薬品や製紙に用いられた明礬、同じ生坂の中塚ではメタンガスの噴出がみられる。

なお、明科から生坂にかけての犀川西岸の地域は、従来は北安曇郡に属していたが、一九五七年(昭和三十)に北安曇郡七貴村・陸郷村・広津村が分割解村して、地理的や経済的關係などから、生坂村・池田町・明科町に町村合併したことによって、東筑摩郡が犀川を越えて西方に広がった地域でもある。

(2) 人と物資の交流

藩域や郡域を越えた道祖神信仰の広がりを考える上では、この地域をつなぐ道を通じた人やモノの動きを把握しておくことも大切である。

美麻には白馬村の飯田から青具・千見を通り、土尻川沿いに高府・中条・笹平

を経て大安寺で峰街道と合流する善光寺道と小川村から越道や味藤を経て信州新町に出て、下市場か大原の渡しで犀川を渡って、大岡から聖峠越えと宮平・芦の尻を経由して麻績に通じる麻績道がある。口留番所は美麻竹の川嶺、千見、信州新町の左右、小川村の日影・立屋、大岡の聖口、市後沢、麻績村の高に置かれた。麻績からは北国西脇往還(善光寺西街道)を通じて松本と稲荷山につながり、一方で安坂を経て修那羅峠をこえて青木の入田沢、上田へと通じていたのが安坂道である。この道は一八二一年(文政四)の史料では「糸魚川より松本へ三十里、糸魚川より飯田・新町通り上田へ三十四里」とあって、上田への距離が松本へ行くのと四里しか変わらず、松本経由で保福寺峠道利用よりはるかに近道であった。この道は当初は歩荷で、後には牛の背で日本海の魚や木綿・富山の葉・輪島の漆器等が上田へと運ばれた。一八三四年(天保五)の史料では、このルートで上田への荷物は千から千三百個が運搬されている。また、安曇地方のわらび粉・紙(松川紙・宮本紙)・刻み煙草(生坂煙草)などは押野で渡川して、会田を経て地蔵峠を越えて入田沢に入り、上田へと運ばれた。

大町から向・温ノ海を通り竹ノ川を経て立屋番所に至り、そこから越道・長井を通り大安寺までの道は峰街道と呼ばれた。大町からは大塩・川下を通り、左右をへて川口に至る道と、は大町の五日町から社・八坂・広津で川手道で山清路に合道する相川通り(別名麻績街道)がある。

日岐から池田への道は日向を通り、かざしお峠を越えて、花見・池田方面への道と日岐から白日に上って、宮ノ平・有明、登波離橋を経て池田へと通じる道、さらに三郷を経て八代峠を越える道がある。生坂白日の大倉などでは池田町会染の里田に出作りの田んぼを所有して、片道一時間の道を通いながらそこで主食の米を生産していた。会染には今も日岐堰や日岐田という地名がある。

また、草尾から平出・菅田方面、宇留賀から菅ノ田・広津へと通じる山道も通じていた。広津から八坂・美麻へは尾根道でつながっていた。山清路は明治一〇年まで峡谷で通行できなかったために雲根から眠峠や雲根峠を越えて込地に出て、そこから大岡の桐沢・笹久・芦ノ尻へとつながっていた。犀川の流れに沿った道

は、南北に通じる犀川道が通じ、舟場は布川峠を越えて八坂・大町とつながる交通の要衝であった。犀川を挟んでの舟渡は、下市場・大原・栃沢・舟場・瀬口にあり、ここには舟場口留番所・瀬越番所が置かれた。

山間地の畑で栽培された商品作物はこれらの道を通じて運ばれ、その集散地となったのが池田町や信州新町であった。本地域には地形・地質などの風土に共通性があり、道を通じた通婚圏や商業圏の人の動きから、情報や伝統行事が伝播しあい、境界地帯にあっても藩域や郡域を越えた文化の共通性を有している地域なのである。

聖山周辺の麻績・大岡・八坂・信州新町では聖山北麓の種池に雨乞いに行き、美麻・八坂の麻づくり農家は麻績の四阿屋山にお参りに行き、八坂西の窪には如意輪観音を刻んだ腹の病気の神であるあずまや神社が祀られている。この道を通じて、日本海のエゴが坂北仁熊まで、そして年取り魚のブリが筑北や麻績の地まで入り込んできている。

一 道祖神をめぐる信仰と祭り

1 道祖神碑の立てられた背景

本地域の道祖神碑の大部分は江戸時代中期から明治時代にかけて造立されている。美麻・八坂の山間地は面積や人口の割に道祖神の数が多い。これは小さな集落ごとに氏神が建立されなくても、道祖神が人びとの心のよりどころとして造立されたことを物語っている。北安曇郡最古の享保七年（一七三二）銘の笠付石塔型（祠形）の道祖神碑が大町市美麻に三基、八坂に二基ある。男女像がはっきりしてくる双体像は享保年間の終わり頃である。このことから、笠付石塔型の道祖神碑は本地域では古式のタイプであることが理解される。屋根の形は享保の頃は入母屋風で、文化年間は流造風である。川下・南平・雲根・芦ノ尻は石祠型で、いずれも屋根に注連縄のヤスをのせている。

道祖神碑に込める具体的な祈りや願いは、生坂村草尾を例にとっても、縁結び

の神、子どもの守り神、悪魔の侵入を防ぐ神、道の神と多様である。これをこの地域でまとめると、縁結びの神（千見・竹の花など）、夫婦和合の神（千見）、性の神（堀之内）、男女の道を教える神（芦ノ尻）、道の神様、道を開いた神様（芦ノ尻）、疫病・厄除け・悪霊除けの神（千見）などである。向では道祖神をよそに移したらそのたたりで疫病が流行ったが、元の位置に戻したらそれなくなったと伝えている。堀之内では病氣予防の神で、オンベ焼きの火でマユダマや餅を焼いて食べると虫歯や歯の病氣にならないといい、北足沼・菅ノ田・下ノ田においては耳の病氣が治るようにと穴あき石が供えられている。さらに、豊作を祈る神でもあり、隣接する白馬村飯森では稲の苗、嶺方では稲穂を道祖神碑に供えると多様である。

このように本地域の道祖神信仰は縁結びの神というのが中心で、そこへ夫婦和合の神・安産・子どもの守り神、疫病・悪霊を防ぐ神、行路・旅の安全を守る神が加わる。さらに五穀豊穡という作神としても祀られるという多様な性格を合わせ持ち、あらゆる願い事を聞いてくれる神であるとともに、疫病・災害・悪霊などから護ってくれる神であるという庶民信仰特有のあり方を示している。

江戸時代には庚申塔や二十三夜塔などと同じ場所に立てられたが、ヤスで屋根を葺いたり、常設の小屋に入れられるのは道祖神碑だけである。道祖神は、一年間を通じて、生活とともにある最も身近な神様で、人びとの祈りや願いを何でも聞き届け、かなえさせてくれる庶民の神、「おらが道祖神さま」であった。また、氏神がなくても村の守り神（子孫繁栄・豊作祈願・災厄防止）として、なくてはならない大切な神で、ムラの共同体の成員に安心・安寧をもたらすために集落や組単位にまつられたムラの構成要素の一つであった。¹⁰⁾

科学や医学が発達していなかった江戸時代の中・後期の人びとは天災を恐れ、種々の病氣や祟りを恐れつつ、豊作祈願や毎日の生活の平穩無事を祈っていた。身近な村内では道祖神に願いを託し、村に悪病神が入ってこないように芦ノ尻や麻績村横屋のような道切りの注連縄を張ったり（写真1）、麻績村の梶浦、真米、円明では道切りの大ワラジを村境に吊した（写真2）。また、大岡村慶師のデイドーボーや明科柏尾のカザガミサマのようなワラ人形をつくって疫病神という悪をワ



写真1 道切りの注連縄 (上 大岡芦ノ尻、下 麻績横屋)



写真2 道切りの大ワラジ (麻績円明)

ラ人形 (写真3) に託して村境に送り出すことによって、村の中の不安や緊張を和らげ、安心して暮らせる村の共同性の世界を回復・再生させようとしているのである。

さらに、江戸後期になると村の古来の神仏のほかに諸国各地の神仏が続々と庶民の中に入り込んできて、村を離れて物見遊山を兼ねて、戸隠や善光寺などの神社や仏閣へ、個人や代参で参拝することも多くなった。その旅立ちにあたっても道祖神に旅の無事を祈願し、残された家族も旅人の安全を道祖神に祈ったのである。さらには修験者などに加持・祈祷・お祓い・護摩供・占いをしてもらうこともあった^⑪。このような庶民信仰の姿を美麻一宇田にある重要文化財の中村家に残された六つの福俵に入れられたお札が如実に物語っている^⑫。



写真3 疫病神送りのワラ人形 (上 大岡慶師のデイドボー、下 明科相尾のカザガミサマ)

2 道祖神盗み

本稿でとり上げた地域には江戸時代後期から道祖神の嫁入り、つまり道祖神盗みの習慣があり、他の村の道祖神を雪の夜などに人に知れないように迎えると、幸福がもたらされると信じられていた。村境まではこっそり運び、自分の村に入ったらにぎやかにはやし立てながら迎えたという。他村のものを借りることによってその信仰の効果を上げるために、道祖神盗みが頻繁だったことは、多くの道祖神碑に「帯代」が刻まれていることからわかる。帯代を刻む道祖神碑は八坂・生坂ともに一六体を数える。

「帯代」は相手部落に支払う祝儀、結納金と、一方では盗難防止の脅し文句とも受け取れる。帯代が刻まれるのは天保末から明治までで、金額の単位は、一般的には明治一〇年頃までは両でその後は円に代わっている。この間に道祖神盗みがおこなわれたとみてよいだろう。さらに、このことは農村への貨幣経済の浸透とみることもできる。また、明治維新を経ても明治の中頃までは民間信仰においては江戸時代の延長であったことも理解される。

生坂村大倉の双体道祖神が造られたのは一八五七年(安政四)で、その前年に

約三^三里^三南にある小泉に道祖神碑を盗まれ、現在は明科小泉の和泉社参道にあって、「大蔵村」と刻まれている。八坂宮ノ尾の一七三二年（享保七）の道祖神には「川下邑施主敬白」と刻まれていることから、北四^四里^四にある美麻川下からもってきたもので、川下には現在一八一一年（文化八）の道祖神がある。麻績村横屋の道祖神は北山にもっていかれたが、大正時代に取り戻し、二度と盗まれないように現在はコンクリート付けにされている。

二 道祖神碑の石材

道祖神碑や他の石造物で最も多用されるのは比較的加工しやすく、風化しない安山岩である。安曇野南部には花崗岩の道祖神碑が圧倒的に多く、その石材はこの地域にも一部で使用されている。その他、蛇紋岩は白馬村のみで使用され、いずれにしても道祖神碑の石材も、その土地の地元で手に入る石材を反映しているといえる。

本地域で地質的に一般的な塊状砂岩は身近にふんだんにあって、手に入れやすく、加工しやすい石のために石灯籠・墓石・手洗い鉢や石仏にも多用され、砂岩製の道祖神がたくさん彫られたのである。しかし、加工しやすい反面、安山岩などに比べて風雨で風化しやすいために（写真4）、砂岩製の道祖神碑を護るためにヤスなどの注連縄で覆ったり、小屋がけされたのである。道祖神碑に添えて丸石・陽石・繭玉石もみられるが、これも新第三紀の砂岩層の中に認められる団塊（ノジュール）として伴出するもので、穴あき石も同様の産出である。

三 道祖神の祭り

(1) 正月の注連縄張り

日本の一年の始まりは玄関先に松にワラの注連縄を飾ることから始まる。一般的に農家や家庭で玄関先や神棚等に注連縄を張るのは、正月を迎える時だけである。注連縄・注連飾りを張って神々を招き、神への供物をヤスに入れる。ヤスは松に捧げる御食を盛る器で、「養う」という意味があるという。



写真4 善光寺道の道標
（左 砂岩・生坂池沢、右 安山岩・美麻向）



写真5 ゴボウジメとヤスを飾る玄関先（大岡）

注連縄は神が出現する場所や神がすまう場所を人間界と結界するために張られ、不浄を清める。そのために左手を手前に引くように縋りをつかける左縄（反時計まわりに上昇）で、この「左巻き上がり渦」は聖なる渦と考えられて、神前を飾る注連縄の基本とされてきた。

本地域では松飾りを飾り付けるのは年末の十二月二十八日が最も多く、三十一日がこれに次いでいる。松は玄関、神棚、床の間、カマド、井戸・便所・土蔵・納屋・厩などに飾るが、最も大きく大切な場所は玄関で左右一對の門松が立てられた（写真5）。注連縄には前垂れジメ、ゴボウジメ、ヤス、輪ジメ、シャモジなどがあり、正月の注連縄は歳神の神送りとして小正月の火祭りで燃やされるのが一般的であるが、この地域の注連縄は燃やされずに道祖神を護る覆いや屋根として再利用されているのである。村の出入り口や中心部には、道祖神や庚申塔・二十三夜塔などが同じ場所でも祀られている場合が多い。数ある石仏の中で、本地域ではなぜか道祖神碑だけが注連縄で飾られたり、注連縄やトタン葺きの小屋に納められていることが多いのである。

正月が終わって門松を片付け、道祖神碑の前で行う小正月の火祭りをする時期と一致すること以上に、この地域の人びとがワラを大事にし、道祖神を特別視し

ていたからこそ、そこに注連縄を張ったり、屋根を葺いたりして、道祖神碑を護ったと考えてよいであろう。このことが、この地域の道祖神の地域性を表現しているといえるのである。

(2) 道祖神碑に供えられる酒樽



写真6 ワラ製酒樽のモデルになった祝樽

残されている。

次の結納の儀式には、生坂村などでは五種目録品（家内喜多留酒、寿留女、子産婦、友志良賀¹¹麻糸を束ねて白髪にみたてたもの、末広¹²扇）と家族の由緒書を添えたが、ここにもヤナギタルが用いられている。つまり、本地域での角樽は、ハレに用いる特別な樽であり、祝いの酒を象徴する容器だったのである。

江戸末期から明治にかけての角樽は、全体に縦長で提げ手用の横渡しがあるタイプで、長い角（柄・手）を提手（腕）に渡し、鏡と呼ぶ上面には栓が付き、胴には上から口輪、胴輪、腰輪、底輪と呼ぶタガがまわる。この地域で道祖神に供えられるヤスを組み合わせてつくるワラの酒樽は、この形態をまねたものといえる。

角樽に入れた酒は神と人を繋ぐものとして、祭り・儀式・行事などのなくてはならないものとしてムラ社会の祭りや生活・文化に組み込まれていたため、わざわざヤスでつくった酒樽を道祖神碑に供えたのである。この酒樽こそ縁結び

の神としての道祖神信仰を象徴するものである。

その証拠に、生坂村草尾と池田町花見では、今では注連縄張りが見られないが、酒樽だけが象徴的に道祖神碑に添えられている。

(3) 火祭りの名称と祭日

この地域の火祭りの名称は北部の池田町の会染・広津・陸郷・草尾ではオンベ焼き、信州新町・大岡・麻績はドンド焼き、生坂村はドーロクジンとオンベ焼き、坂北の竹場や生坂の雲根、池田花見では三九郎と呼んでおり、ここが火祭り名称の接点になっていることもわかる。

道祖神碑の屋根を葺き替えたり、火祭りをおこなうのは美麻の向は一月三日、池田町の堀之内は一月四日で、最も多いのが一月七日で、竹場・芦ノ尻・雲根・野田沢・丸山・宮本などである。

特徴的な火祭りに、竹場のものがある。一月七日の三九郎の火祭りの際、「火にくべる」といって石像の道祖神碑を火の中に投げ込んで、清浄な三九郎の火で燃やすことで、村人の厄払いをし、終わると元の位置に戻されて、ヤスの屋根に護られるのである。

四 芦ノ尻の道祖神祭り

1 芦ノ尻道祖神の特徴

芦ノ尻は長野市大岡の聖山の西方に位置し、木寅山の山麓、標高八〇〇¹³の平坦面にある。江戸時代は大岡村の枝村で、一六六四年（寛文四）より宮平組に属した。村高は宝永年間〜文政年間に一二七石余で、文久年間の戸数は四四戸で、大岡村の中では大村であった。¹⁴ここは牧ノ島から聖峠か宮平を通り、北国西脇往還の麻績宿に通じる道が通過していたため、聖口と市後沢には松代藩、麻績側の高に松本藩の口留番所が置かれた。また、芦ノ尻から犀川筋への道は長岩・佃見へと花尾・根越から代を経て瀬口に至る道があり、隣の笹久からは桐沢に下り、込地からは生坂へと通じる道がある。



写真7 芦ノ尻の道祖神が立つ村境



写真8 芦ノ尻の神面裝飾道祖神 (左) とシメ縄で覆う道祖神碑 (右)

芦ノ尻の正月準備は年末の松迎えから始まる。近くの山に入り、松を切り、枝の根元の皮をむき、雑木でおおって一本縄でぐるぐる巻いて束にして家に持ち帰る。これを玄関先にゴボウジメやヤスの注連縄、紙垂とともに、一二月三十一日から一月七日まで飾る。

芦ノ尻の道祖神祭りは、もともとは一月二五日であったが、昭和初期からは「松の内が長すぎて、働かねえとだめだ」ということで、一月七日に実施している。この日に各家々では注連飾りを外して村境の道祖神碑の立つ場所に運ぶ。

ここは麻績側から来ると村の入り口に当たる場所で、大きな赤松が数本植えられ、そこに砂岩製の古い祠形の道祖神碑があり、その中に一四×一二センチの小さな双体像が刻まれている。その西側に一八六八年(明治元)に立てられた一五五×九〇センチの安山岩製の文字碑の道祖神があり、これにワラで「神面裝飾」が付けられる。その西側に一八六〇年(万延元)の銘をもつ庚申塔が二基と青面金剛像を刻んだ庚申塔、一八四三年(天保一四)に立てられた二十三夜塔、ほかに馬頭観音、地藏尊、一八三〇年(文政一二)の日本八十八番供養塔などが立てられて、村境の風景を形づくっている(写真7)。

道祖神碑への飾り付けをおこない、その前で火祭りをを行うのはかつては一五歳

以上の未婚の男の若い衆であった。ドンド焼きの心棒となる松・栗・檜の三本を近くの山から切り出してから、道祖神文字碑に一年間つけられていたワラ人形と道祖神の小祠を覆っていた注連縄を取り外す。

最初に、正月飾りに用いた注連縄(前垂れジメ・ヤス・ゴボウジメ)で、眼・鼻・口・眉毛・口ひげ・笠(かんむり、帽子ともいう)を付けていき、高さ一・五坪ほどの「神面裝飾」を飾り付ける。次に御神酒樽・三重ねの酒杯・肴(鯛)をつくり、ワラ人形の前に供える。御神酒樽は飾り付けで余ったヤスを束ね、下を切りそろえて、胴部を三か所で縛り、栓もつけている。

各部位に用いる注連縄の種類は、眼・鼻・口・笠・酒杯は前垂れジメで、特に眼は二重にして瞳までつくり出している。眉毛・口ひげ、肴はゴボウジメ、そして御神酒樽はヤスである。

次に、この隣にある道祖神祠には注連縄(前垂れ)で屋根をつくり、そこにゴボウジメとヤスを添え、その前に注連縄でつくった御神酒樽と肴を供え(写真8)、当日若い衆(一五歳の新成人)は一升瓶の酒を供える。さらに、北側の道路には道切り(ツジキリ)の注連縄を張る。

ワラを使うのではなく、注連縄に加工されたワラ細工を部品にして、組み合わせ、新たな造形を生み出したものである。バラバラのワラからでは細かい細工は難しいが、しっかり編まれた注連縄の特徴を生かしながら、組み合わせのみで新たな造形が可能となったのである。

この後ドンド焼きのヤマを大小二つくり、最初に小さい「迎え火」に火をつけ、この火で取り外した古い注連縄を焼く。次に大きなヤマは結婚した男衆が火をつけ、部落の方に倒れると凶作で、東側に倒れると豊作といわれ、この残り炭を陰部に塗ると陰毛が生えるといわれている。

翌日の早朝、自分の年の数の銭(昭和初期からは銭に似せた人参や大根の輪切り)を落しながら祭場へ行き、あまった銭を道祖神に上げて厄落としのお願いをした。厄を落とした人は後ろを見ないで家に帰る。振り返ると厄にとりつかれるという。



1



2



3



4



5



6



7



8



9

写真9 注連縄を張る道祖神碑 1 美麻・一字田 2 大岡・笹久 3 生坂・鷺ノ平 4 大岡・花尾・根越 5 大岡・日方
6 信州新町・塩本 7 坂北・上平 8 麻績・横屋 9 麻績・丸山



芦ノ尻の祠を覆う注連縄は石造の道祖神を一年間風雨から護るため、文字碑を覆う人面も同じ目的のために、塩崎のワラ人形のように燃やされることはない。「村境でにらみを効かせて悪霊から守ってくださる」といい、一年間村境に疫病神などが入ってこないよう見守る防ぐ神なのである。



写真10 注連縄を被せる道祖神碑 1 信州新町・左右 2 同・平清水 3、4 八坂・下笹尾 5 信州新町・宮ノ脇 6 同・宮平

2 地域色の強い道祖神分布

この地域の道祖神碑の研究は、『北安曇の道祖神』を除き、それぞれの町村単位の自治体誌や石造文化財の報告書では、人びとの信仰から離れて、道祖神碑の



写真11 ヤスを被せる道祖神碑 1 大岡・萱刈場 2 大岡・仏風 3 麻績・野田沢



写真12 注連縄で上部を覆う道祖神碑 1 美麻・川下 2 生坂・南平 3 生坂・雲根 4 大岡・市後沢 5、6 大岡・芦ノ尻



写真13 小屋がけし注連縄（ヤス）で覆う道祖神碑 1 坂北・竹場 2 明科・塩川原 3 同左 4 明科・小芹 5 大岡・桐沢 6 信州新町・岩下



写真14 注連縄（ヤス）で屋根をつくる道祖神碑

1 美麻・向 2 池田・堀之内 3 池田・相道寺 4 生坂・万平 5 生坂・北平



写真15 ワラで小屋がけする道祖神碑

1 八坂・梨平 2 大岡・萱刈場

みが個別に扱われてきた。また前書も北安曇郡内にとどまり、隣接する更級郡大岡、上水内郡信州新町、東筑摩郡坂北・麻績の道祖神との関連性について触れられていない。一般的には行政区画で歴史や民俗をとらえるのが常道で、郡・藩の境界地帯にある本地域のような場所を統一的に把握することはなかったのである。

本稿では従来の道祖神碑のみに注目するのではなく、注連縄を用いて道祖神碑を現在まで護ってきた多様な道祖神信仰のありかたを、地域史の中で明らかにすることが目的である（表1）。

A 道祖神碑に注連縄を張るタイプ（写真9）

これはこの地域に限らず多くに地域で見られる。道祖神祭りがおこなわれる小正月の前に新しい注連縄を道祖神碑に張り替えるものである。いずれも覆屋がなく、双体像・文字碑のいずれにもゴボウジメや塩本のような前垂れジメを張るが、上平は太い大根ジメである。一宇田は太い注連縄を張るために、碑の上部に小枝を束ねて補強している。注連縄からは三個の太房が下がっており、単なる注連縄を張るとは異なり、碑の保護という要素がみえるが、一月末には取り外されてしまう。和平・日方・丸山例をみると、注連縄張りという要素より、装飾的な要素が強いように見受けられる。花尾・根越は碑の上部にヤスをのせている。生坂の鷺ノ平では、注連縄りに酒樽を添えられて地域色が表現され、注連縄を張って道祖神を清めるというだけにとどまらず、別の要素が加わっているとみてよいだろう。

B 道祖神碑に注連縄を被せるタイプ

（写真10）

表1 注連縄を飾る道祖神一覧表

集落名	市町村名	注連縄・屋根	酒樽	型	碑の種類	石材	銘文	備考
向	大町市 (美麻)	ヤス屋根寄棟・ワラ		F	双体	砂岩	享保18 (1733)	
一字田	大町市 (美麻)	シメ張り		A	双体	安山岩		
川下	大町市 (美麻)	ヤスで覆う・石祠		D	双体	砂岩		
切久保	大町市 (八坂)	小屋シメ		I	双体	砂岩	享保7 (1722)	
宮の尾	大町市 (八坂)	小屋シメ		I	双体	砂岩	享保7 (1722)	川下邑施主敬白
宮の尾	大町市 (八坂)	小屋シメ		I	双体	砂岩	明治38 (1905)	
押の田	大町市 (八坂)	小屋シメ	酒樽	I	双体	砂岩	文久3 (1863)	帯代廿五両
梨平	大町市 (八坂)	ワラ小屋・木の支柱		H	双体	砂岩		檜平より移転
小菅	大町市 (八坂)	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	双体	砂岩	天保5 (1834)	
長畑	大町市 (八坂)	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩	天保6 (1835)	
上笹尾	大町市 (八坂)	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩	文化9 (1812)	
下笹尾	大町市 (八坂)	シメ被せ		B	双体	砂岩		
明野	大町市 (八坂)	ワラ小屋・木の支柱		F	双体	砂岩	文化8 (1811)	栗尾平から移転
明野	大町市 (八坂)	ワラ小屋・木の支柱		F	双体	砂岩	文化8 (1811)	作の平から移転
明野	大町市 (八坂)	ワラ小屋・木の支柱		F	双体	砂岩		布川から移転
明野	大町市 (八坂)	ワラ小屋・木の支柱		F	双体	砂岩		土袋から移転
小松尾	大町市 (八坂)	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	円柱	砂岩		
万仲	大町市 (八坂)	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩	弘化3 (1846)	金十両帯代
菅の窪	大町市 (八坂)	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩	嘉永5 (1852)	帯代壹両
十石	大町市 (八坂)	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩	明治10 (1877)	帯代拾五両
岩下	長野市 (鬼無里)	ワラ小屋・木の支柱		H	自然石	砂岩		内部に御幣を立てる
萱刈場	長野市 (大岡)	ワラ小屋・木の支柱		H	自然石	安山岩		小屋の中の石にヤス被せ
芦ノ尻	長野市 (大岡)	ワラ人形 酒樽	酒樽	L	文字	安山岩	明治元 (1868)	
芦ノ尻	長野市 (大岡)	シメで覆う 酒樽	酒樽	D	双体	砂岩		
市後沢	長野市 (大岡)	ヤス被せ		C	双体2	砂岩		
桐沢	長野市 (大岡)	ヤス屋根・木の支柱	酒樽	E	文字	安山岩		
日方	長野市 (大岡)	シメ張り		A	文字	安山岩	昭和62	
宮平	長野市 (大岡)	シメ張り		A	文字	砂岩		
和平	長野市 (大岡)	シメ張り		A	双体	安山岩	弘化2年 (1845)	穴あき石
仏風	長野市 (大岡)	ヤス被せ		C	文字	安山岩		
笹久	長野市 (大岡)	シメ張り		A	双体2	安山岩		帯代五百両
花尾・根越	長野市 (大岡)	ヤス被せ・シメ張り		CA	文字	安山岩		
古坂	生坂村	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	自然石	安山岩		碑は硅化木
鷺ノ平	生坂村	シメ張り	酒樽	I	双体	安山岩	明治21 (1888)	
大岩	生坂村	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	A	双体	砂岩	享保14 (1729)	八坂十石と同場所
才光寺	生坂村	小屋シメ・鉄・屋根トタン		I	双体	安山岩	安政6 (1859)	
中畑	生坂村	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	文字	砂岩		
寺沢	生坂村	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	双体	砂岩		
会	生坂村	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	文字	砂岩	明治32 (1899)	
北平	生坂村	小屋ヤス切妻・コンクリ・鷗尾	酒樽	I	双体	砂岩	明和9 (1772)	米俵添える
南平	生坂村	ヤスで覆う・石祠	酒樽	G	双体	安山岩	文化3 (1806)	
中塚	生坂村	小屋シメ・屋根トタン		D	双体	砂岩		
大久保	生坂村	小屋シメ・石祠		I	双体	砂岩	享和9 (1725)	
込地	生坂村	小屋シメ・ブロック		I	双体2	砂岩	天保12文化10	
雲根	生坂村	ヤスで覆う・石祠	酒樽	I	祠	砂岩	文政元年 (1818)	陽・陰石
竹ノ本	生坂村	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	D	双体	砂岩	明治3 (1870)	
下ノ田	生坂村	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	双体	砂岩	昭和53 (1978)	穴あき石
梶本	生坂村	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	双体	砂岩	嘉永4 (1851)	
草尾	生坂村	小屋・屋根トタン	酒樽	I	双体	砂岩		
草尾	生坂村	小屋シメ・屋根トタン		J	双体	安山岩	平成15 (2003)	
甲斐沢	生坂村	小屋シメ・ブロック		I	双体	砂岩		
下生坂	生坂村	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩		松も添える

集落名	市町村名	注連縄・屋根	酒樽	型	碑の種類	石材	銘文	備考
万平	生坂村	ヤス屋根・木の支柱・鷗尾	酒樽	I	双体	砂岩	天明 8 (1788)	
小舟	生坂村	小屋シメ・屋根トタン		G	双体	砂岩		丸石
日岐	生坂村	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	双体	砂岩	安政 4 (1857)	丸石
白日原	生坂村	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩	天保 4 (1833)	像は朱塗り 丸石
白日大岩	生坂村	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩		
白日大倉	生坂村	小屋シメ・コンクリ・屋根トタン		I	双体	砂岩	安政 4 (1857)	
竹場	筑北村 (坂北)	ヤス屋根・木の支柱		E	双体	砂岩		碑を三九郎の火に入れる
上平	筑北村 (坂北)	シメ張り		A	双体	安山岩		
野田沢	麻績村	ヤス被せ・ゴボウ		C	双体	安山岩		
丸山	麻績村	シメ張り		A	文字	安山岩	昭和16 (1941)	
下井堀	麻績村	シメ張り		A	文字	安山岩		
宮本	麻績村	小屋シメ		I	双体	砂岩	文化 8 (1811)	陽石 穴あき石
菅ノ田	池田町	小屋シメ・屋根トタン	酒樽	I	双体	砂岩	明治 2 (1869)	河原石 帯代五両
桃ノ木	池田町	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩	文久 2 (1862)	穴あき石
梅之尾	池田町	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩		
南足沼	池田町	小屋シメ・屋根トタン		I	文字	砂岩		穴あき石
北足沼	池田町	小屋シメ・屋根トタン		I	丸彫双体	安山岩		
南足沼	池田町	小屋シメ・屋根トタン		I	文字	砂岩	昭和13 (1938)	丸石
有明	池田町	小屋シメ・屋根トタン		I	双体	砂岩	明治16 (1883)	帯代金百円
堀ノ内	池田町	ヤス屋根寄棟		F	双体	安山岩		
相道寺	池田町	ヤス屋根寄棟	酒樽	F	双体	花崗岩		ワラ馬添える
花見	池田町	小屋・屋根トタン	酒樽	J	双体	安山岩	安政 4 (1857)	帯代金二十五両
七五三掛	池田町	小屋・屋根トタン		I	双体	花崗岩	文政13 (1830)	
塩川原	安曇野市 (明科)	ヤス屋根・木の支柱		E	自然石	安山岩		
塩川原	安曇野市 (明科)	ヤス屋根・木の支柱		E	自然石	安山岩		
小芹	安曇野市 (明科)	ヤス小屋・木の支柱		E	双体	砂岩	安永 4 (1784)	下地カヤ
小芹	安曇野市 (明科)	同		I	文字	砂岩	天保 8 (1837)	
池桜	安曇野市 (明科)	小屋シメ・屋根トタン		I	丸彫双体	砂岩		陽石添え
柏尾	安曇野市 (明科)	小屋シメ・屋根トタン		I	丸彫双体	砂岩		
左右 (日向)	信州新町	小屋シメ		B	双体	安山岩	天保 7 (1836)	藨玉石
左右 (日影)	信州新町	シメ被せ		I	双体	砂岩	昭和 7 (1932)	丸石・藨玉石
高登屋	信州新町	小屋シメ			自然石	砂岩		
柳久保	信州新町	小屋シメ			自然石	砂岩		
川名	信州新町	小屋シメ		I	双体	砂岩		
宮ノ脇	信州新町	シメ被せ		I	文字	砂岩	嘉永 7 (1854)	
宮平	信州新町	シメ被せ		B	文字	砂岩	天保 2 (1831)	
坂井	信州新町	シメ小屋・ヤス屋根		H	文字	砂岩		藨玉石
岩下	信州新町	シメ小屋・カヤ・トタン・シメ		B	文字	砂岩		
平清水	信州新町	シメ被せ		A	文字	安山岩		
塩本	信州新町	シメ張り			文字	砂岩		
細尾	信州新町	シメ張り			陽陰石	砂岩		岩穴 藨玉石

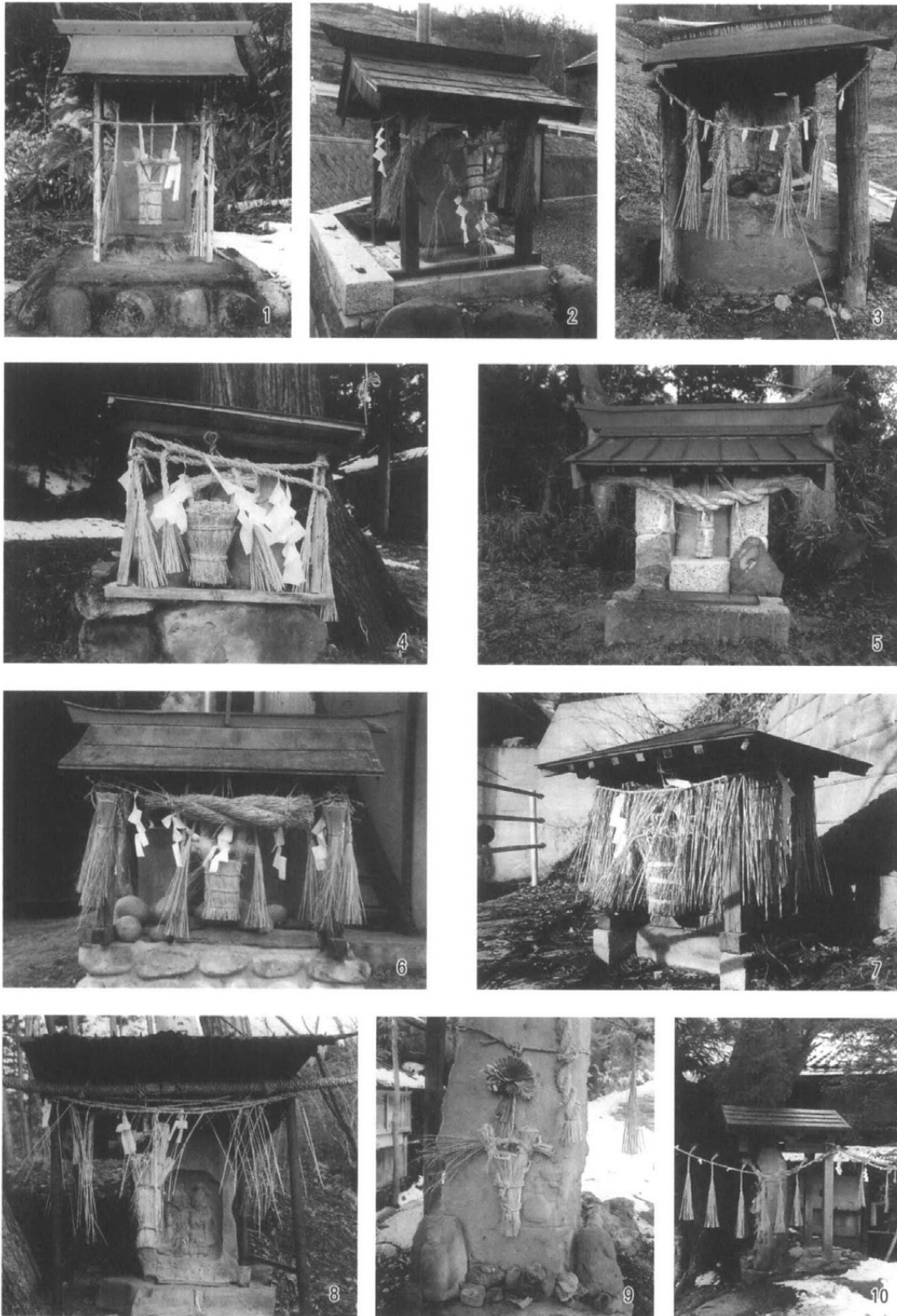


写真16 覆い屋に注連縄を張り、酒樽を添える道祖神碑
 1 生坂・竹ノ本 2 生坂・槐本 3 生坂・古坂 4 生坂・会 5 生坂・下ノ田
 6 生坂・日岐 7 八坂・小菅 8 生坂・寺沢 9、10 池田・菅ノ田

この分布は、八坂・信州新町と本地域でも北部にあり、信州新町の左右・宮ノ脇・宮平・平清水では前垂れシメを道祖神碑に被せ、下笹尾ではそこにヤスやゴボウシメも無造作に被せられている。平清水では三本の木を組んでその上から前垂れシメを被せており、これには注連縄を張るといふより、むしろ道祖神碑を保

護するという要素が強いのである。

C 道祖神碑にヤスを被せるタイプ (写真11)

大岡と麻績のみ認められ、仏風は文字碑、野田沢は双体像の道祖神碑である。いずれも大きなヤスを頂部に被せて、一年中据え置かれることから、道祖神碑を



写真17 酒樽のみを添える道祖神碑 1 生坂・草尾 2 池田・花見

保護しようとする意図がはっきりしている。萱刈場はワラ小屋内の自然石の道祖神碑にヤスを被せている。

D ヤスで道祖神碑の上部を覆うタイプ (写真12)

生坂の北部から大岡、美麻の南部にあり、市後沢の双体像を除き、笠付きあるいは祠形の道祖神で、いずれも砂岩製という共通点がある。その屋根部分をヤスカ前垂れで覆うもので、芦ノ尻のみは前垂れジメで、他は何本かのヤスをまとめて用いており、雲根はゴボウジメで屋根飾りを付けている。また、雲根と芦ノ尻には酒樽が供えられている。芦ノ尻のこのタイプは、ヤスの覆い、酒樽という二つの要素でこの地域の道祖神の特徴を示しているのである。

生坂雲根のドーロクジン祭りには、各家からヤスを持ち寄って双体像が入っている石の祠の屋根を葺くが、前年に葺いた屋根を祭りの前夜に人知れず焼くと早く結婚できるといった。これをフルヤラクという。サンクローの灰を陰部につけると早く毛が生えるという。また、ドーロクジンは道行く人を守る神様で、旅立ちの時に参拝してから旅に出たという。

このタイプは形態や造立年代から本地区では最も古く、石材が風化しやすい砂岩であることから、その風化から道祖神を護るために注連縄で覆われた最初の姿

を今に伝えているとみてよいだろう。

E 小屋掛けしてヤスで屋根を葺くタイプ (写真13)

四隅に支柱(クギソウ)を立てて、横木で簡単な小屋組みをし、片屋根にヤスを載せるものタイプで、明科・大岡、坂北に分布する。

塩川原のもう一例は木を三角形に組んで、ヤスで切り妻風の屋根にしている。小芹のものは柱の木も太く屋根の下地にカヤを入れて丸くなるように補強している。同じようにカヤを入れてその上にトタンをかけたものは信州新町の岩下にある。

石材は塩川原の二例を除き、砂岩であり、小屋がけすることから、明らかに道祖神碑の保護が目的であることがわかる。

F 小屋掛けして、寄せ棟屋根風にヤスで屋根を葺くタイプ (写真14)

池田の相道寺・堀之内と美麻の向のみに認められるタイプで、いずれも双体像の道祖神碑である。四本の太い木の支柱を立てて、その上にヤスの屋根を載せている。相道寺例はヤスを五段に重ねて屋根を葺いており、その頂部はまとめて尖らせ、細縄で巻き上げて補強しており、造形的にも見事である。さらに、そこに酒樽とワラ馬が供えられている。

大町市美麻の向では中心に松の木を立てて、ヤスで屋根を葺く。一月三日のオンベ焼きに合わせて、地区の未婚の男性が「道祖神の屋根葺き」といって、注連縄やワラを用いて道祖神碑の屋根を新しく葺き替える。古い注連縄やワラはオンベ焼きで燃やす^⑮。なお池田町において平坦部で道祖神碑に屋根がかけられている地域は会染地区だけである。

G 小屋がけして切り妻屋根にシャチホコ状の飾りを付けるタイプ (写真14)

生坂村内のみにあって、万平では四本の太い支柱を立て、その上にヤスで三段の屋根を葺き、頂部の両側はヤスを横に束ねてまとめ、シャチホコ状の飾りを付けている。北平も現在のようにコンクリートの小屋の前は、万平と同じ支柱構造であったと考えられる。シャチホコ状の飾りは、細い縄を巻き付けて形を整え、補強している。この両方に酒樽が供えられており、北平では小屋内にワラでつくっ

た小さな米俵が二個置かれている。

H 注連縄とワラで小屋をつくるタイプ (写真15)

大岡と八坂に二例あり、梨平は砂岩製の双体像、萱刈場は自然石である。いずれも前面を除いた側面三面をワラで覆って壁にし、屋根をのせるタイプで、萱刈

場では風で飛ばされないように、割った竹でしっかり押さえている。これはまぎれもなく道祖神碑を護るためのワラ小屋である。梨平の道祖神は檜平(うつきだいら)から住民とともに、ここに移転したもので、もとの檜平にあった時は注連縄のみで小屋掛けしていたが、今は注連縄が足りないためにワラで小屋がけをし



写真18 覆い屋に注連縄を張る道祖神碑

1 生坂・大久保 2 生坂・原 3 生坂・大岩 4 信州新町・左右 5 生坂・大倉
6 生坂・日岐 7 生坂・才光寺 8 生坂・小舟 9 麻績・宮本



写真19 覆い屋に注連縄を張る道祖神碑

1 池田・有明 2 榑ノ尾 3 八坂・上笹尾 4 池田・北足沼 5 池田・七五三掛
6 生坂・上生坂 7、8 信州新町・細尾

ているとのことである。

I 常設小屋に注連縄・酒樽を添えるタイプ（写真16）

本来は支柱を立てて屋根をのせたり、ワラ小屋であったものが、毎年小屋をつくったり、葺き替えたりする手間を省いて、道祖神を風化から護る目的で木造の

小屋を建て、雨漏りを防ぐために、トタン屋根を葺いたものである。そこに小菅のような前垂れジメやゴボウジメの注連縄をはり、酒樽を供えるタイプである。古坂の自然石を除き、ほかは砂岩製の双体像の道祖神である。分布は八坂、池田、生坂にあって、生坂地区に集中している。

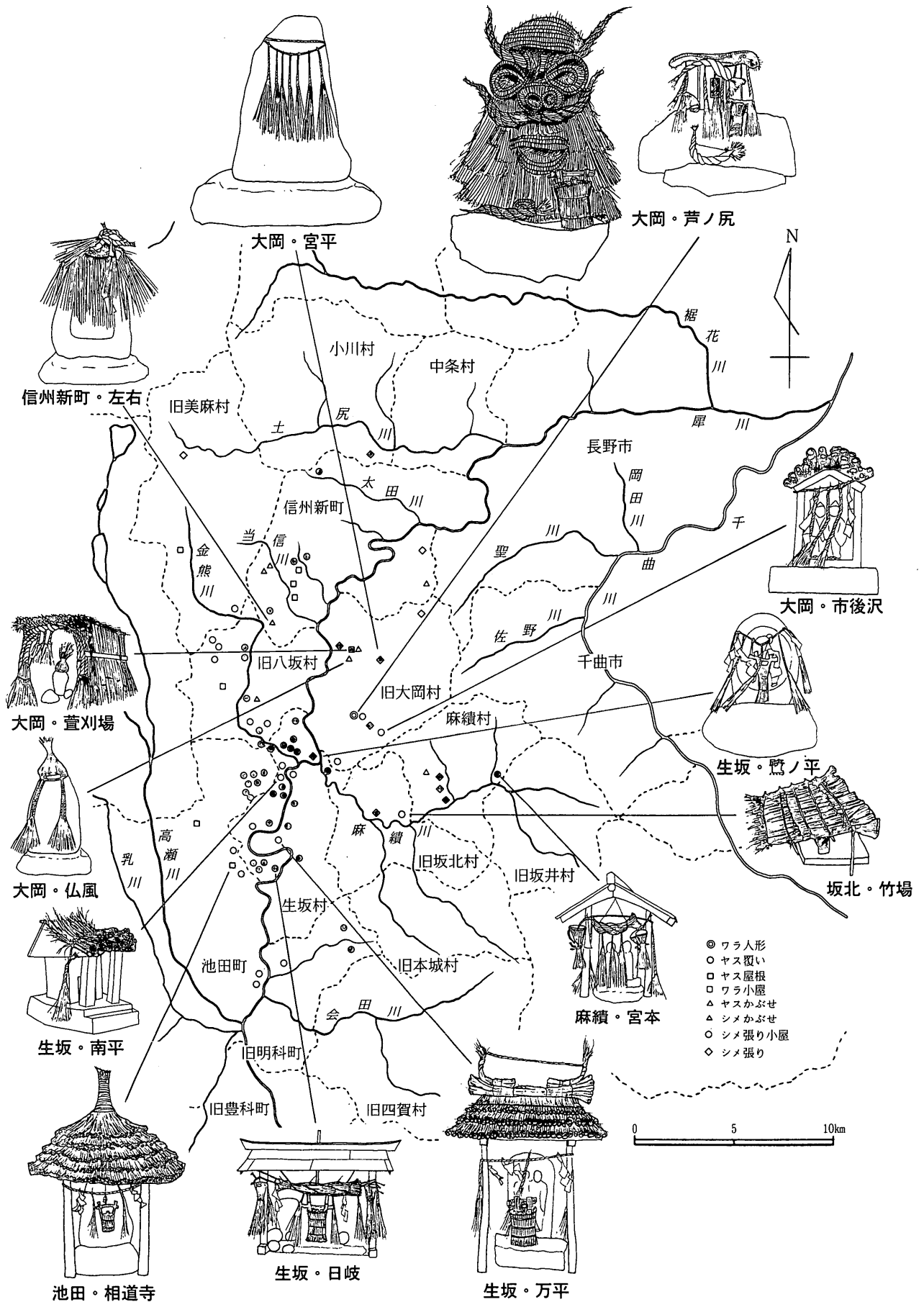


図3 中山山地・犀川丘陵における道祖神の分布 (宮下 2007)

生坂宇留賀の才光寺や会では、「道祖神小屋」と呼び、そこに張ってあった注連縄を、元日に取り壊して、七日に屋根替えをした。現在のような常設小屋になる以前、上生坂や下生坂では一四日に古い屋根を焼いて、一五日に屋根を葺き替える。日岐では一五日に作り替えた。

竹の花では昭和五〇年ころまで、一月七日の午前中に集めた注連縄を材料に、ドロックジンを入れた小屋の屋根を葺き替えたという。

J 常設小屋に酒樽のみを供えるタイプ（写真17）

池田花見と生坂草尾の二例のみであるが、本来はIタイプのように注連縄も張られたものが省略されて、酒樽のみが象徴的に残されたのである。草尾では平成一〇年まで南平と同じように祠の道祖神の屋根にヤスを並べて保護していたが、注連縄も少なくなって、シメ張りをするとはなくなったが、平成一五年にはその左手に安山岩の大きな双体道祖神碑をつくり、その際に木造の小屋をつくり、道祖神を「ウチノナカニイレタ」という。現在、昔の名残の酒樽だけを作り続けているのは、道祖神は縁結びの神で、かつては縁結びの際にはサケイレで角樽をもっていったからだという。花見では昭和三〇年代まで、相道寺と同じようにヤスで毎年屋根を葺き替えていたという。

K 常設小屋に注連縄を張るタイプ（写真18・19）

生坂を中心にして八坂、池田、信州新町、麻績と広い範囲に分布し（図3）、この中の生坂や池田の例には本来は酒樽を供えていたものが、現在では省かれた例も多いかと考えられる。小屋は木造にトタン屋根が基本だが、才光寺は鉄骨にトタン屋根、大倉と込地はブロックにコンクリート屋根である。

L 芦ノ尻のワラ人形道祖神（図1）

五 芦ノ尻道祖神の系譜関係

一九三一年（昭和六）発行の『東筑摩郡道祖神圖繪』によると、ヤスで屋根を葺き、前に酒樽を供えた道祖神は生坂村込地、同上生坂石原端、八坂野平にあり、麻績村下井堀東村では酒樽はないがヤスの屋根の写真が掲載されており、ヤスで

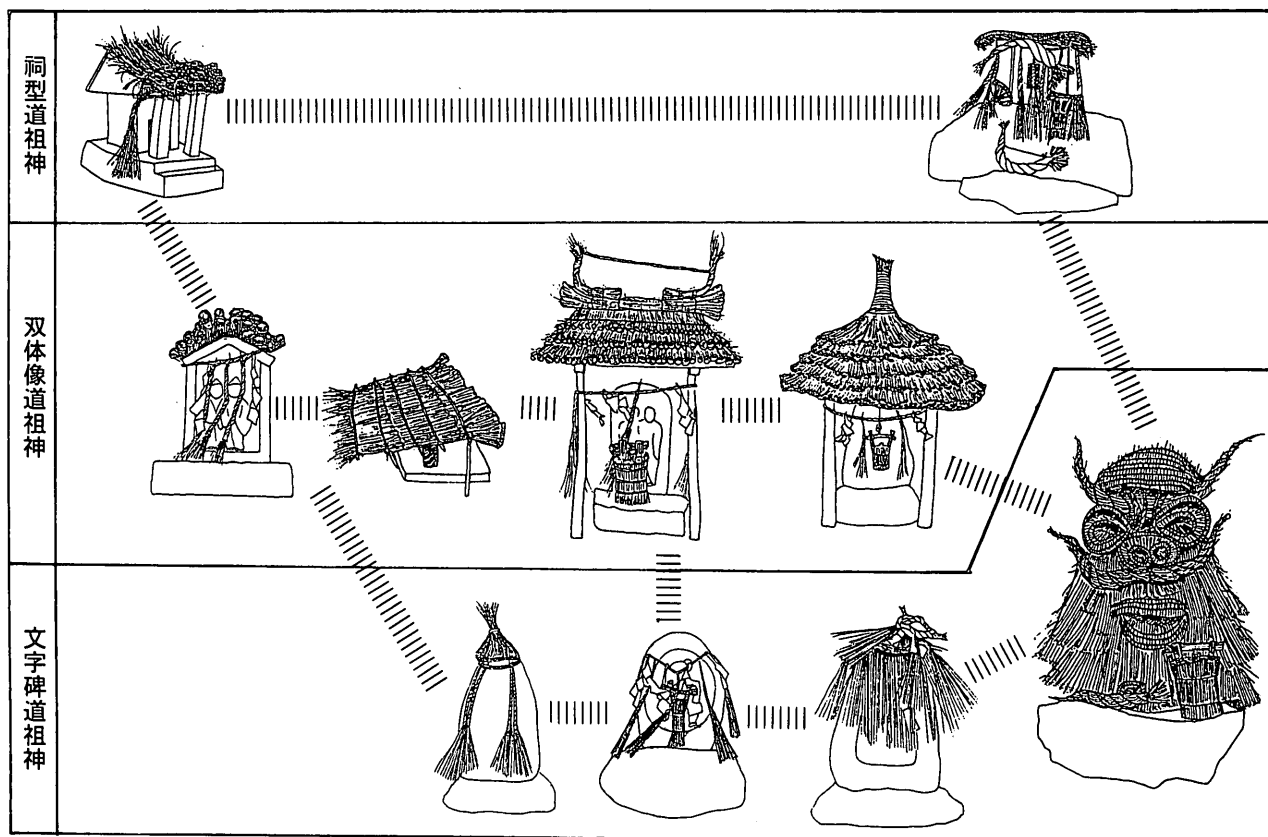


図4 芦ノ尻道祖神の系譜（宮下 2007）

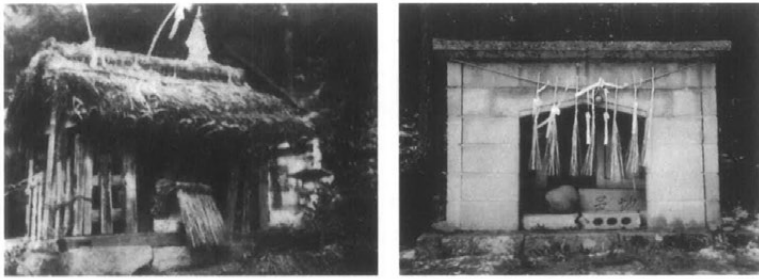


写真20 生坂村込地の覆い屋の変化 (左 昭和6年 右 平成18年)

屋根を葺く道祖神が麻績村までおよんでいたことがわかる。信濃教育会北安曇部会が昭和六年に発行した『北安曇郡郷土誌稿第三輯』には、松納めとして、「注連とやすは門松の足に縛りつけて置いて一五日に道陸神の屋根を葺くに使ふ所がある(会染・陸郷・美麻)」と書き、口絵に池田町堀之内の写真載せており、形態は現在のものと変わらない。

会染には日岐から陸郷通り、八代峠越えの道、草尾から四人峠を越える道、広津から平地に出るこの三本に道はすべて会染で平地に出ることができ、山間地の畑作地帯との文化交流によって安曇野側の平地部分では会染のみにヤスで屋根を葺いたり、酒樽を供える道祖神碑が認められる。

生坂の大倉では昭和三〇年ころまでは、道祖神碑を覆う小屋はなく、四本の杭を立てて柱にし、そこに屋根の横木を渡してその上にヤスで屋根を葺いたという。このことは込地で昭和六年に撮影された写真からも判明し、本来は注連縄を用いた簡単な小屋から、ブロック積み

の覆い屋に作り替えたことがわかる(写真20)。昭和四七年ころは池田町の菅ノ田・日野・日影、八坂の切久保・長畑・中畑・小菅・荻では注連縄とワラで、道祖神碑を護る小屋をつくっている。

このうち日野と中畑のものは現在の美麻の向のタイプと同じで、日影のものは現在の生坂村北平のものと類似している⁽¹⁶⁾。さらに昭和六〇年ころの記録では、池田町の日野と荻では、向タイプの小屋がつくり続けられており、南足沼や日影山の道祖神碑の前には酒樽が供えられているのである⁽¹⁷⁾。

こうしてみると、この地域の道祖神は神の宿った正月飾りの注連縄を小正月の火祭りで燃やすことなく、ヤスで上部を覆ったり、頂部を覆ったり

したものが、木を組んでヤスや注連縄で本格的な屋根を葺いて小屋をつくり、やがて毎年作り替えなければならない簡易な小屋に代わって、恒久的な木造や鉄骨・ブロックの小屋となり、雨漏がしないようにトタン屋根となった。

芦ノ尻の道祖神の人面の飾り付けは一般的には明治の初期に始まったとされているが、県史民俗編では「正月の注連飾りをドローグジンサマに巻きつけて飾ったが、今のように顔を作ったりするこった飾りはしなかった⁽¹⁸⁾」と地元住民が述べている。

この「巻きつけて飾った」のは、現在の大きな文字碑の道祖神も八坂の下笹尾のようなタイプであった可能性があり、その始まりは今までまったく注目されなかった人面の隣にある祠形の道祖神を注連縄で覆うことの影響とみることができ、この祠形の道祖神碑に注連縄で覆うことこそ、この地域の道祖神碑に共通する要素であり、畑作地帯で貴重品であった正月飾りの注連縄をドンド焼きの火で燃やすことなく、砂岩製の道祖神を風化から護るために再利用するというワラ文化こそが、芦ノ尻の道祖神を生み出したと考えたい(図5)。すなわち、本地域で江戸時代から継続していたのは神の宿った注連縄で砂岩製の道祖神を風化から護ることであった。それを芦ノ尻ですつと続けてきたのは神面装飾道祖神の右隣にある小さな祠形の道祖神碑であった。

その毎年の繰り返しの中である時、悪霊の侵入を防ぐ神として文字碑の大きな道祖神に⁽¹⁹⁾、どこの村にもいるようなコウシヤな人が現れて、神の姿を神の宿った前垂れジメ・ゴボウジメ・ヤスという注連縄を組み合わせてつくることを始めたのであろう。神面装飾道祖神の誕生である。そこへ、隣の祠形の道祖神に供えるためにつくられ続けてきた御神酒樽・肴を供え、新たに御神酒樽とセットとなる酒杯を加えたのではないか。

この神面装飾道祖神が伝統的な道祖神碑の保護を目的としないことは、裏側をみると明らかで、前面の神面装飾をしっかりと固定するために細縄やゴボウジメをつなぎ合わせて前面とは対照的に無造作に縛り付けているのである(写真21)。

道祖神碑に注連縄を張ることと、注連縄で屋根を葺くことは、道祖神を護ると



写真21 芦ノ尻神面裝飾道祖神の裏側

いう観点からそれを祀る人びとの大きな意識差がある。その意味でこの地域は山間地の畑作地帯を共通ベースにして独自の道祖神文化圏を形成してきたといえる。

六 道祖神信仰を支えた畑作とワラ文化

1 平地より有利だった山中の生活

本地域の道祖神信仰を支えたのは山間地の畑作農業を営む村であった。なぜ、江戸時代からこの地域に多くの人が住み、生活できたのか。道祖神信仰を理解する上で避けては通れない問題である。

かつてこの地域は傾斜地の畑作地帯で、大麦・小麦・大豆・そば・稗・粟・油荳などの雑穀、麻・煙草・楮・漆の実・いばたの木・胡桃・柿渋などが主な産物であった。この地域の傾斜畑地での主要な換金作物は北部は麻・葉たばこで全域では養蚕の桑であり、条件の悪い山間地の畑においても現金収入が得られたのである。生坂たばこは慶長年間（一五九六～一六一五）に上生坂の照明寺に最初の種が伝わってから、江戸時代には信州を代表する特産物で、明治になっても生産は拡大する。『信府統記』によれば、松本藩は一七四二年（寛保二）に領内に桑・楮・桐を植えることを奨励している。さらに松本藩は一八一六年（文化一三）に御作方から『養蚕録』を村むらに配布して、「五人組毎に一冊宛渡し渡して組下の婦女までも残らず読み聞かせ、その家のためになるように心がけ専一にせよ」と申し付けていることから、養蚕の普及のようすが知れる。⁽²¹⁾ 八坂村では一七八二年（天明二）に代官から「養蚕手引書」が村むらへの回状として回っている。

美麻の高地村の場合、江戸初期の慶安年間に三〇数戸の村が、幕末には戸数・人口ともに約二倍に増えている。⁽²²⁾ また、一七二五年（享保一〇）ころの池田町村（旧池田町）の人口は八四三人に対して、八坂八か村の人口は二五九三人となっていて、山間地に人口が集中していたことがわかる。⁽²³⁾

この背景として、江戸中期の元禄のころより貨幣経済が発達して、商品作物の生産が盛んになるが、その商品作物を栽培するのは水田ではなく畑であった。山間地の畑で作物を栽培し、山から得られる林産物を含めてそれを加工し商品化して販売することが盛んになった。山間地の畑作地帯では、経済が発展して農作物の商品化が進めば進むほど有利性を増大させていったのである。さらに、山間地の村には山林や原野の一部を焼いて畑とし、地力が衰えると再び原野に戻すような生産を行う切替畑がつくられ、これは年貢の対象外だった。高地村ではこの切替畑が実に七町歩にもおよんでいた。⁽²⁴⁾ また、ここに自宅で飼育していた馬の田起こしや代かき作業への貸し出しや駄賃稼ぎをする作間稼ぎなども加わったのである。高地村では単位面積あたりの人口割合が高く、畑作では商品作物を栽培することによって、少ない耕地面積でも多くの人口を支える集約的な農業が営まれ、余剰分を拡大していったのである。

すなわち、江戸時代の経済は米穀中心の「米づかいの経済」であったため、山中の村むらの課税基準である村高は低く抑えられており、上畑でも上田の半分の価値しかなく、畑の年貢における斗代は田の下々より低く評価されていた。つまり、畑作地帯は水田地帯に比べて年貢率は相対的に低かったのである。それゆえに本稿が取り上げた山間地の畑作率の高い村ほど有利な条件に恵まれたために江戸時代には水田をつくれないうような山間地に畑作集落が拡大していったのである。⁽²⁵⁾ その経済的な豊かさが民間信仰にも大きな影響を与え、八坂では近世中期の元禄年間（一七世紀）より文字のある石造物が現れはじめ、享保年間（一八世紀）には数が増えているのである。⁽²⁶⁾

明治以降をみると、一八七七年（明治一〇）ころのこの地域の畑作の面積は第二表のようである。たばこ栽培の明治三年の記録では、その栽培面積は生坂村

表2 明治初期の人口・田畑面積・馬牛数・物産(『長野県町村誌』による)

村名	人口	水田面積	畑面積	馬	牛	物産
美麻村	3287	128町2反9畝17歩	627町7反3畝16歩	64		麻8100貫・麻布150反・楮皮907貫・雉子193羽・兎93疋・猪67疋・鶏卵13000・鶏卵種510羽・米・大麦・小麦・大豆・小豆・蕎麦・稗・粟・豌豆・黍・蕪菜・蘿蔔
八坂村	2930	53町9反1畝25歩	557町6反8畝7歩	87	56	葉煙草190駄・刻煙草980箇・宮本紙1200束・繭53貫・麻395束・醤油・清酒・生柿78駄・楮・桑・炭980俵・栗12石・雉150羽・胡麻・松茸15貫・芍薬・桔梗・白朮
祖山村	1160	12町1反2畝4歩	29町8反2畝6歩	100		米・大麦・小麦・大豆・蕎麦・粟・麻1035束・農間に紙漉・伐薪
日影村	1351	54町1反2畝25歩	191町2反4畝9歩	146		米・大麦・小麦・大豆・小豆・蕎麦・粟・黍・稗・豌豆・蘿蔔・蕪菜・胡蘿蔔・馬鈴薯・茄子・瓜・南瓜・大角豆・獨活・蕨・栗桃・楮300貫目・狐7頭・猿6頭・熊1頭・麻1690貫目・畳糸1370貫目・皮麻240貫目・蚊帳115反・炭900貫目・清酒110石
鬼無里村	2818	64町9反3畝25歩	324町1反2畝	233		米・大麦・小麦・大豆・小豆・蕎麦・粟・稗・黍・豌豆・蘿蔔・蕪菜・胡蘿蔔・馬鈴薯・茄子・瓜・南瓜・大角豆・獨活・蕨・栗桃・楮900貫目・鶏・鶏卵・雉子100羽・猪15頭・狐10頭・猿9頭・熊1頭・麻3355貫・畳糸2730貫・皮芋480貫・炭3600貫・蚊帳200反・山中紙300束・清酒120石
大岡村	3006	152町6反3畝16歩	341町8反2畝28歩	139		糊入紙1万6千束・小判紙2万束・煙草2125斤・藍6875斤・繭20石・桑3万5千貫・楮皮1万5千貫・清酒・米・麦・蕎麦・大豆・小豆・粟・稗・豌豆・大角豆
生坂村	2734	14町8畝6歩	328町6畝21歩	85	42	刻煙草550駄・楮・漆・桑・桐・杉・紙・串柿
坂北村	2814	113町1反8畝15歩	216町1反1畝28歩	41		刻煙草3000箇・葉煙草1300箇・中折紙30駄・生糸50貫
麻績村	2265	164町7畝1歩	141町7反5畝21歩	83		紙・繭・生糸・干瓢・茸
日向村	1554	9町3反2畝6歩	117町6反8畝4歩	16		中折紙300駄・杏仁10石・繭20石・煙草・芍薬
池田町村	1973	238町6反8畝2歩	57町3反3畝29歩	92		煙草3000貫・生糸・蚕卵・清酒・米・小麦・大麦・大豆・稗・菜種
会染村	2284	311町3反9畝14歩	125町5畝10歩	225		米・清酒・葉煙草9600貫・刻煙草100箇・生糸19貫・蚕卵300枚・宮本紙500束・指下駄25000足
広津村	2995	17町5反9畝14歩	614町3反8畝1歩	50		生糸1貫・刻蓆600駄・中折紙100駄・米・麦・山葵・清酒
陸郷村	2585	33町3反7畝2歩	500町7反8畝1歩	94		卵米・大麦・小麦・大豆・小豆・粟・黍・稗・蕎麦・豌豆・大角豆唐黍・葉煙草15030貫・刻煙草326箇・繭3石・生糸3貫800目・宮本紙600把・大判紙100把・中判紙50把・桑・楮・甘柿2050貫・胡麻・油荏・鶏卵・渋柿1400貫・製薄荷30斤
東川手村	2793	29町7反5畝11歩	284町9反1畝5歩	94	16	煙草1070駄
信岡村 (水内村)	1936	4町4反9畝20歩	148町4反19歩	22	6	麻三ッ打10駄・生糸3000斤・藍玉256駄・生蠟150貫・桐下駄40駄・麻布150反・桐板25駄・桐甲裏30駄・筆1000本・伽羅油250貫・蚕種1345枚・酒・醤油・米・大麦・小麦・大豆・小豆・粟・蜀黍・稗・菜子・実綿・麻60貫・楮9600貫・桑24200貫・蘿蔔2800貫・菜・蕪菜・芋・茄子・隠元豆・胡蘿蔔・牛蒡
水内村	1032	7町7反9畝22歩	146町1反8畝14歩	35		繭200石・蚕卵紙200枚・鯉100尾・鮒200尾・年魚1000尾・鶏・鶏卵・雉子30羽・米・大麦・小麦・菜子・豌豆・大豆・小豆・蕎麦・粟・唐黍・胡麻・大角豆・蘿蔔・胡蘿蔔・蕪菜・菜・芋・甘藷・牛蒡・茄子・実綿250貫・葉藍7810貫・麻41貫・桑・生糸15箇・玉藍300駄・細美600反・皮楮1960貫(坂井・麻績・日向村へ)
山上條村 (津和村)	900	5町4反1畝19歩	132町8畝23歩	57		味噌3240貫・麻芋118貫・麻布460端・藍玉10駄・鶏・鶏卵・雉子15羽・米・大麦・小麦・大豆・小豆・粟・黍・稗・蕎麦・豌豆・隠元大豆・蜀黍・菜子・胡麻・実綿・葉藍・桑・楮2890貫・煙草120貫・蕪・胡蘿蔔・芋・牛蒡・茄子
越道村	1488	2町3反1畝24歩	196町9歩	88		網糸20貫400目・細縄739筋・麻布281反・清酒・焼酎・麻実10石余・麻30貫・同998貫・同460貫・皮麻91貫・楮3720貫500目・葉藍650貫・米・大麦・小麦・大豆・小豆・粟・蕎麦・黍・蜀黍・稗・豌豆・蘿蔔・胡蘿蔔・蕪菜・牛蒡・茄子・葱・胡瓜
信級村	1052	20町2反1畝23歩	125町2反2畝25歩	124		小判紙100束・藍葉300貫・青麻2700貫・繭10石5斗・鶏卵・米・糯米・大麦・小麦・粟・大豆・小豆・蕎麦・蜀黍・黍・稗・楮
孟津村 (日原村)	892	15町9反1畝17歩	108町3反16歩		71	生糸11貫・杉原紙3400束・粘入紙8200束・小盤紙3800束・煙草1400貫・藍4500貫・清酒・繭20石5斗・鶏・玉子米・大麦・小麦・大豆・小豆・粟
中牧村 (牧郷村)	828	63町8畝7歩	84町4畝22歩	102		粘入紙150束・小判紙254束・小杉紙1060束・繭1石・米・大麦・小麦・粟・大豆・小豆・蕎麦・稗・馬鈴薯・楮皮102貫
牧田中村 (牧郷村)	381	23町7反8畝24歩	43町8反2畝27歩	25		粘入紙448束・小判紙240束・小杉紙640束・繭70貫・米・大麦・小麦・大豆・小豆・粟・蕎麦・柿・藍葉・葉煙草1050斤
弘崎村 (牧郷村)	530	23町7反8畝1歩	59町1反4畝1歩	48		米・大麦・小麦・粟・大豆・蕎麦・繭100貫・粘入紙320束・山中紙1600束・小杉紙3840束・炭150駄・牡丹皮72貫・楮皮2450貫・材木松杉28駄



写真22 生坂日岐大倉の桑畑 (生坂村誌より)

七四町、陸郷村三五町、広津村七一町であった。また、美麻・八坂・広津・陸郷の大正一〇年の主要産物はそば・麻・養蚕・木炭・木材とわずかな米であった。中でも麻・そば・木炭の生産が多かった。

養蚕は明治時代になると国策によって振興されるようになり、八坂の鷹狩や広津平出、麻績野口などの風穴を利用した夏蚕・秋蚕用の蚕種の保存も養蚕業の発展の上で大きな役割を果たした。養蚕は明治末から大正・昭和初年まで畑作農家の

の主産業であり、この地域の斜面は見渡す限り一面の桑畑だった(写真22)。農家では、繭の生産量を増やすために母屋の他に蚕室も建てられ、収量の多い家では年間二〜三トンにも達した。農林業に依存する自給自足的な傾向の中において、この時期に「畑作農業王国時代」を迎えたのである。こうした中で、山間部の畑作地帯と結びついた池田町や信州新町は近隣の山村から物資や人が集まり、そのお客で商業が栄えたのである。

昭和五年には繭価が大暴落し、その後も価格は低迷したが繭の生産量は減少することなく、農業収入における養蚕の王座の地位は昭和四〇年代まで続いた。生坂村での最後の養蚕農家は平成二年の四戸であった。

2 畑作地帯におけるワラ文化

本地域の道祖神に注連縄を再利用する要因を解明するには、この地域におけるワラ文化を明らかにしておく必要がある。

稲作農耕を基本とする日本人は、注連縄をはじめ食生活・住生活・生業・履物、運搬、燃料、肥料、飼料などあらゆる生活領域にワラを使い、日々の生活を支え、最後は土に返されて新たな生命を育てる糧となるという独自のワラの文化を築い

てきた。ワラは農民の日常生活には不可欠で、鍋敷・釜輪・飯櫃・円座・呷・蓑・草履・草鞋・雪靴・筵・蓑・背負子・背負い籠・炭俵(の縄)などの生活用品の材料、縄・荷縄・荷付け縄・雪囲い・ワラニョウ・保温用ワラと農作業には欠かせないものであった。それゆえに、夜なべ仕事や冬季の副業として、家族総出でワラ仕事に精を出してきたのである。

山から離れて薪が少なく、ワラの豊富な平地の水田地帯では燃料としてワラを多用した。特に稲ワラの柔らかい火で炊いた飯の味は格別で「飯はワラで炊くもの」といわれた。いっぽうで、ワラがなく薪が豊富な山間地で貴重なワラを燃料に用いることは「家をつぶす」といって禁忌にもなっていた。こうしたことから山間地の畑作地帯と平地の水田地帯との間では、ワラを媒介にした交易・交換がみられた。山地の薪・炭・茅・草と平地のワラが交換されて、山地の冬の副業でつくられたワラ細工を平地の人が求めたのである。一八四四年(天保一五)池田組の職種と作間稼ぎをみると「藁細工」が七軒もみられ、同年の池田町村店商いの販売商品には「草履」二軒、「わらじ」二軒が記されている。

一八七七年(明治一〇)の八坂村には男で「藁細工をする者百五〇人、菅筵を織る者二五人、石工を業とする者八人、刻良を業とする者百十二人、炭焼をする者一八人、牛馬売買をする者七人」、女で「良葉巻をする者百五〇人、養蚕をする者八〇人、麻製する者百三〇人、木綿布麻布を織る者百五〇人、紙漉をする者一四人、炭俵を編む者三〇人」と記している。八坂村の牛馬は明治一〇年に馬八七頭、牛五六頭で、それが大正に入ると馬は二〇六頭に増えている。

生坂村の丘陵上にある大倉では出作りをしていた池田会染の田から稲ワラを馬の背の両側の三束ずつ六束の大きなワラ束をつけて大倉まで何往復もして運んだという。また、一九四五年(昭和二〇)に初めて田んぼがつくられる以前の生坂村草尾では、ワラは米とともに会染から購入して馬の背で運んできたという。八坂の檜平は大町の三日町から馬の背で六束のワラを運んだが、一日一往復がやっとであったという。

このように水田のない山間の畑作地帯ではワラの絶対量が不足し、ワラに対す



写真23 勝手に常設されたワラ打ち場

る高い価値と熱い思いを置く文化が育まれていたために、大倉や草尾の小正月の火祭りであるオンベ焼きには、その火がよく燃え上がるようにワラの代わりに麦ワラと豆ガラを用い、注連縄やワラは決して燃やすことはなかったのである。

こうした事例から、ワラを媒

介とした平地と山間部の社会的、地域的、文化的結合のようすが知れ、その具体的な姿が池田町の会染地区とその背後の山間部にみられる注連縄で道祖神の屋根を葺く姿であるといってもよいであろう。

さまざまなワラ細工の中でも、注連縄に用いるワラは特別扱いされた。⁽²⁶⁾「ワラはお米の親」と考えられ、そこには稲霊・呪力が宿り、生長のエネルギーが内包すると考えてきたからである。だからこそ、注連縄は神の依り代となったり、外部から入ってくる邪悪なものへの侵入を防ぐことができるのである。

自分の田の中でも最もよく実り、刈が落ちないようにつばな穂をつけた稲を選択し、天日で清浄に乾燥させ、雨に濡れないように保存した。それを丁寧にワラ打ち石の上で横槌でワラ打ちをした。ワラは打たれることによって弾力性を増し、吸湿性を増大させ、その上細工しやすくなるのである(写真23)。

特に本稿で取り上げた地域の正月飾りの注連縄は、小正月の火祭りで燃やされることなく、自分たちの生活を守ってくれる身近な神である道祖神を風雨から守るとともにその祭場を標示する役割も果たしてきたのである。

この地域の人びとは注連縄・ワラ人形・ヤスの屋根をつくることによって道祖神に対する敬虔な思いを表現してきたといってもよい。つまり、ワラを通して神とのコミュニケーションをはかりながら、道祖神碑を祭る場をハレの祭りの場としてデザインしてきたともいえるのである。それは村の中に道祖神と共に住まう



写真24 美麻中村家のおれ入り福俵と俵巻き

空間をデザインしてきたともいえる。

道祖神碑を護る屋根以外にも、道切りにも注連縄が用いられ、また、ワラは疫病神を送るワラ

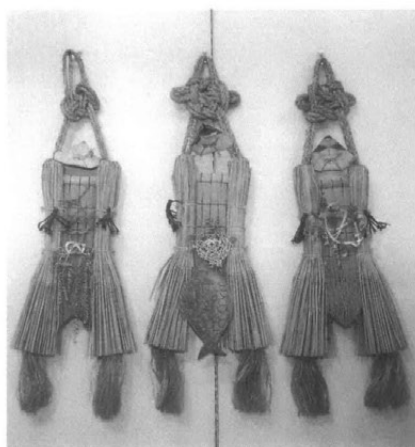


写真25 大岡の結納に使うワラ細工(サンシキ)

婦の後ろ壁に掛けた「鯛(たい)」「勝男(かつお)」「寿留女(するめ)」「子産婦(こさんぶ)」の「サンシキ」(写真25)

などのハレの人生儀礼の大切な場面で用いられ、精神生活の上でも大きな役割を果たしているのである。こうしてみると、本地域は山間部の畑作地帯にあつて、独自のワラ文化を育んできた地域ともいえる。

本稿で取り上げた道祖神を風雨から守ってきた注連縄・ヤスの材料となる稲ワラさえ最近では入手が困難になってきている。多収穫・味の良さを追求してきた稲の品種改良、ハゼ掛けによる天日干しをすることなしに、コンバイン収穫による脱穀とワラの寸断によって、ワラの文化そのものの消滅の危機にあるといってもよい。ワラの文化は高度経済成長以後の近代化・工業化に伴う、大量生産・大

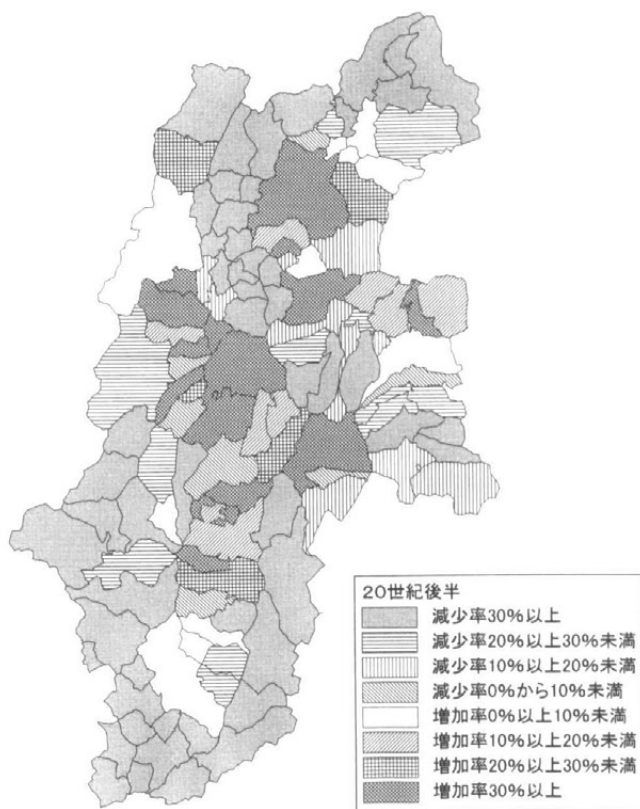


図5 1950年と2000年の人口比較

量消費・大量廃棄の波に押されて、石油をもとにしたビニール・プラスチック製品が農村部にも入り込み、その姿を急速に消しつつある。日本における「ワラの文化」の終焉はワラ打ち石（ジョウベシ）が家の中からなくなっていく、昭和三五〜四〇年といわれている。⁽²⁷⁾ ワラ文化の喪失は、一面において日本の伝統的な生活文化の消滅を意味しているのである。

七 過疎化の中の民俗行事

1 畑作地帯の過疎化

本稿で取り上げた長野盆地の西方の犀川流域、西山地方を中心とした地域は東・北・中信にまたがる過疎集中地域となっている。⁽²⁸⁾ その北部は豪雪地帯という条件が加わる。この地域の二〇世紀後半の一九五〇年と二〇〇〇年の人口比較では、本地域では五割から七割も人口が減少しているのである。信州新町（五六・六割）、

旧大岡村（六六・二割）、生坂村（五九・六割）、旧八坂村（六〇・七割）、旧美麻村（六七・九割）、池田町（二四・六割）である（図5）。

旧美麻村では明治初年から昭和三〇年ころまでの八〇年間は人口に大きな変化がなく、明治から大正にかけての人口は、北安曇地方一七町村のなかで一・二位を占めていた。ところが戦後の高度経済成長が始まり、所得格差が拡大する中で、昭和三五年から四五五年の一〇年間に全村で一五八世帯、一四八五人も減少したのである。

その中で最も顕著だったのは高地地区である。明治五年一一〇戸、大正一五年九九戸、昭和九年に九五戸あった世帯数が、昭和三七年から挙家離村が始まり、昭和四〇年になるとさらに拍車がかかり、昭和四四年には高地分校が廃止され、さらに深刻化した。そして、昭和五三年には三戸、そして昭和五五年には〇となり、まさに挙家離村の典型村となった。交通が不便で山間谷間の傾斜地の畑作地帯、そこへ豪雪地・地すべり地域という幾つかの条件が複合して、大部分が職場のある大町市へと移転したのである。⁽²⁹⁾

この間の一九七〇年（昭和四五）には過疎地域対策緊急措置法が制定され、美麻村・八坂村が「人口の急激な減少により地域社会の基盤が変動し、生活水準および生産機能の維持が困難」な「過疎地域」に指定された。昭和五〇年（一九七五）からは集団で交通の便のよい場所に移転する集落整備事業も始まり、八坂の芋沢地区六戸が舟場へ（昭和五〇）、桑梨・檜平九戸が梨平へ（昭和五二）、桐山地区ほか八戸が舟場へ（昭和五二）、中の沢地区七戸が舟場へ（昭和五五）、西の窪地区三戸、上籠の全戸は舟場に移転（昭和五〇〜五六）、上籠の沢地区三戸が刈干場へ（昭和五六）、明野には二〇戸の新しい集落が生まれ、地志原地区九戸が野平に（昭和六一）に移転した。昭和六〇年代に入ると第二の過疎化の波がこの地域を襲うようになった。

さらに、日本の高度経済成長の波を受け、一九六〇年一二月には「国民所得倍増計画」が出され、翌年に制定された農業基本法により機械化や化学化（化学肥料・農薬）が促進され、兼業化と「三ちゃん農業」が広がり、兼業化の進展は手

のかかる畑作を縮小して稲作への集中化を促した。しかしこの動きは本地域にあっては水田がないために稲作への集中もできず、狭い急斜面の畑では機械化さえ導入できないために過疎化にさらなる拍車をかけたのである。

そうした中で一九七一年からは米の過剰と農産物の輸入増加の中で、減反政策が始まった。さらに兼業農家は農業所得の依存度が低くなり、片手間農業、山間地から平坦部の企業に勤める土地持ち労働者へと変化していった。それを可能にしたのが過疎債による道路整備と一九七〇年代からの急速なモータリゼーション、自動車の普及であった。これにより農家世帯員の世帯別、個人別の独自行動が増え、若夫婦の親世代からの自立や嫁の自立化が顕著になった。いっぽう自家用車の普及により公共交通が次第に廃止され高齢者や車を運転しない過疎地域住民の不便さが増し、行政サービスからも取り残される事態が出てきた^{②③}。

これが昭和五〇年代からの農業従事者の減少^{②④}と極端な高齢化、離村、畑地の耕作放棄に油を注ぐことになった。これ以後山間地の畑作地域の農業では桑・養蚕に代わる現金収入源がなく、古くからの畑作の代表であった麦・大豆も国際化に伴う低収益性によってその栽培を減少させた。生坂村では広い河岸段丘上にある草尾上野の高台が、桑畑からブドウの巨峰団地化されたことを除いて、急斜面の荒廃した桑畑は果樹への転換もできなかったのである。

まさに、山間地の傾斜地の多い地域における農林業を中心とした経済的基盤の弱体化が露呈したのである^{②⑤}。

2 人とともに移転した道祖神碑

小集落が消滅して廃村になり、産土神は美麻村高地のように大町の若一王子神社へ移転したが、多くの石仏はその場に残されて草木に埋もれ、探すのも大変な状態になっている。そうした中で、道祖神碑だけは住民と共に移転した集落が意外と多い。全村が移住した美麻品生、八坂の間羽・谷洞の道祖神碑は穂高神社へ、八坂の小田谷の道祖神碑は若一王子神社の境内に移転した。

美麻高地の保屋曲尾の道祖神碑は大町温泉郷へ、高地の小米立は大町市の塩の

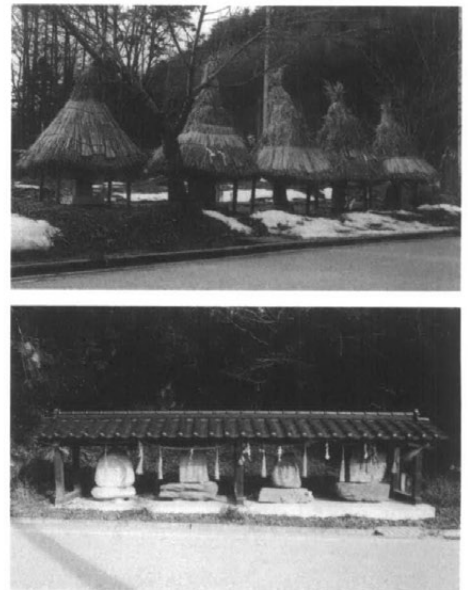


写真26 住民とともに移転した道祖神
(上 八坂明野、下 同舟場)

道博物館の庭に移転し、今も関係者が秋に集まって神主を招いて祭り・直会を行っている。明賀の道祖神碑は大町市に移住した西村春美宅の庭へ、胡桃蔵里のもの

は大町市の窪田房治宅の庭に移転している。
八坂村^{うづき}槍平の道祖神碑は住民と共に梨平へ移されて、かつては注連縄で屋根や小屋をつくったが、移転後はワラで小屋をつくっている。八坂の新しい住宅地である明野には栗尾平・作の平・布川・土袋の道祖神碑が住民と共に移転してカヤと注連縄で屋根を葺いて団地入り口に並べて置かれ、八坂の産羅川・沢村・中畑の道祖神も国道一九号線沿いの舟場へ移され、りっぱな瓦屋根の建物の中に安置され、「道祖神団地」を形成している(写真26)。

数ある石仏の中でなぜ道祖神碑だけを移転したかを聞くと、どこでも「道祖神は大事は縁結びの神様だから」という答えが返ってくる。梨平へ槍平から移住した老人は「自分たちは道祖神のおかげで縁が結ばれ子どもができたが、子どもやその孫の縁結びのために道祖神をもってきた」と話してくれた。そして、移転した道祖神の前を通るたびに、小学校五年生の孫の縁結びを祈っており、息子にまだ早すぎると言われているという老婆の話も聞いた。ここには縁が結ばれることで、家や村が繁栄してきたという長い歴史が横たわっているのである。

おわりに

以上、道祖神信仰という窓口を通して、畑作地帯における農村社会の変容をみ

ながら次のことを論じてきた。

①本地域の道祖神碑は地質学的に共通する新第三紀層の海底堆積の砂岩を石材に用いてつくり、風化の激しい道祖神碑を風雨から護るために、正月飾りに使用した注連縄で覆ったり、小屋がけするという地域性を有している。

②こうした江戸時代以来の伝統の中で、注連縄を部品として酒樽などの造形を生み、やがて道祖神碑を覆うという要素と注連縄を組み合わせるという要素が合体して、大岡芦ノ尻の人形道祖神が誕生した。

③この道祖神信仰の背景として、本地域の山間地の畑作地帯は平地の水田地帯より有利で、畑での商品作物の集約的な栽培や養蚕で、少ない面積でも多くの人口を支えることができたために集落が拡大し、集落ごとに縁結びの神として道祖神碑が立てられていった。

④一般的には、小正月の火祭りや燃やされる注連縄を本地域で道祖神碑の保護に用いてきたのは、ワラが貴重であった畑作地帯のワラ文化が生み出したものであった。

⑤その地域が一九六〇代以降の高度経済成長の波の中で、養蚕業の衰退や麦・大豆などの輸入農産物の増加によって急速に過疎化が進み、集団移住を余儀なくされる中で、道祖神碑だけは、人とともに移転され、その信仰が継続され、本地域での根強い道祖神信仰を裏付けている。

平成の大合併に伴い、大岡村は平成一七年一月一日に長野市に、明科町は同一〇月一日に安曇野市に、坂北村は同年一〇月一日に坂井村・本城村と合併して筑北村となった。美麻村と八坂村は平成一八年一月一日に大町市に合併した。いっぽう、生坂村・麻績村・池田町・信州新町は合併せず、地方交付税が減額され、厳しい財政状況の中にあっても単独で自治を行う道を選択した。

市町村合併に関わらず、農村社会では地域に伝承されてきた生活習慣や伝統行事をしっかりと受け止めながら、日々の生活を営んできたのである。年中行事などの民俗行事は地域社会やそこに住む人びとの生産や日常生活と密接に関わりあっているからである。その生活の中の不安や心配を解消したり、これから始まる

農作業への祈りや願望、期待感があってはじめて道祖神などの民間信仰や行事が成り立つものである。正月は一年の中では最も神聖で、特別な思いで迎える年始めの時である。その歳神を迎える上で不可欠なのが注連縄・門松である。正月を祝うことを止めることはないが、今後も末長く注連縄をつくり続けるという保証もない。また注連縄をつくっても、それで道祖神碑の屋根を葺くことなく、火祭りをしなくなるといふ手ぬきの方向が考えられる。

芦ノ尻の神面装飾道祖神もかつては未婚の若い衆がその担い手であったが、今は五〇代から七〇代と高齢化し、「あと五〜一〇年もすればやり手がなくなる」と保存会では心配している。本稿に記録した芦ノ尻の人形道祖神やヤスの屋根や酒樽などが一〇年後のどれほど継続されているか心配である。

こうした中で、生坂村の大倉はかつて一二戸、七〇数人であったが今は八戸一人になってしまった。このうち四戸は老人の一人暮らし、二戸が老人二人暮らし、残り二戸が三人以上で、小学生二人、高校生が一人である。このような過疎化の波の中で、本年一月七日に、昭和一八年以来途絶えていた道祖神祭りに伴う紙御幣が、六四年ぶりに復活した(写真27)。犀川流域では唯一の御幣で、復活の中心となった真島知司氏(七七歳)はこのままでは地域の伝統文化が消えてしまうと危機感を抱き、周囲に協力を呼びかけ復活したが、この祭りを知っていたのは七〇〜九〇代の四人だけだった。この復活にはふるさとの昔を忍び、昔の人の意気込みを知り、御幣を楽しんで明日からの心の糧としてほしいとの熱い願いが込められているのである。

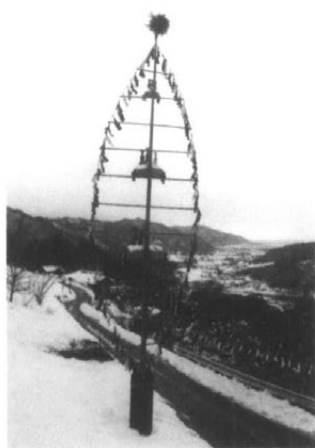


写真27 生坂村大倉で64年ぶりに復活した紙御幣

平成の大合併に象徴される日本国土全体の都市集中化への大きなうねり、そしてすべてを欧米流の合理的機能的なフィルターにかけ、利潤原理に基づく効率主義の波の中で、日本的な土着の風俗・風習・

伝承文化などが否定され、それを大事に担ってきた村社会は財政難を盾にした地方交付税削減という切り捨て政策の大波が押し寄せてきているのである。

本稿が取り上げた地域のようにかつては山間の畑作地帯ゆえに潤っていた集落が、一九六〇～九〇年代というわずか三〇年間で、燃料としてガス・石油を買い、水道で水を買ひ、その上で過疎にあえいで消滅するという歴史は過去に一度もなかったのである。消滅しないまでも集落機能を失いつつある限界集落を区や市町村の支援を得てどう維持し、日常生活を営むとともに、伝統的な年中行事等をどのように守り伝えていくかが大きな課題である。道祖神信仰やその火祭りなどの民俗行事は村社会の良さの一つであり、道祖神信仰に託す暮らしと命の大切さを失うことは都市化社会にはない農の心や村の豊かさを失うことを意味しているのである。

注

- 1 千曲川水系古代文化研究所『大岡村芦の尻の道祖神祭』一九七六年。
- 2 神野善治『人形道祖神―境界神の原像』(一九九六年、白水社)。
- 3 細井雄次郎『大岡芦ノ尻の道祖神再考―セイゾーボー行事との関わりの中で―』『長野県民俗の会会報』二九、二〇〇六年。
- 4 宮下健司『ムラの生活と道祖神祭り』『信濃』三一―、一九七九年。
- 5 宮下健司『道祖神火祭りの系譜』『長野県民俗の会会報』七、一九八四年。
- 6 明治四年(一八七二)の廃藩置県までは大岡村・信州新町は松代藩領の里方に対して山中大岡通(二一村)・同新町通(一八村)であった。松本藩領との境の聖口と市後沢に口留番所を置いた。明科・生坂・八坂・池田・美麻は松本藩領の麻績組(一五村)・池田組(一七村)・大町組(二六村)であった。池田には御他屋とよぶ藩の主張所が置かれ、松代藩領との境には美麻の千見、麻績に高と麻績番所を置いた。
- 7 武田久吉『路傍の石仏』第一法規、一九七一年。
- 8 明科町史刊行会『明科町史 上巻』一九八四年。
- 9 青木村誌刊行会『青木村誌 歴史編上』一九九四年。
- 10 近世における村の祭祀形態は一村一鎮守(氏神)という形態は確立しておらず、村

氏神がもつ村統合の機能は希薄であった(長野県『長野県史通史編第五巻近世二』一九八八年)。

11 庚申信仰は江戸中期以降に各地の農村で始まり、その信仰だけでなく、農作業や農耕技術などの情報交換の場としての村寄合的な性格を有していた。また石造物からみると、江戸時代は道祖神・庚申・観音(なかでも馬頭観音)・地藏・月などが庶民の主要な信仰対象で観音巡礼や念仏信仰もさかんだった(長野県『長野県史通史編第五巻近世二』一九八八年)。

12 中村家は元禄一年(一六九八)に建てられた民家である。平成九年に解体修理された際、六つの福俵の中から、幕末から明治にかけての戸隠・善光寺はじめ、北は塩釜、南は出雲大社や金比羅までの神仏札が一五〇枚も発見されている。

13 石川県立歴史博物館『祝樽』一九九六年。

14 大岡村誌刊行会『大岡村誌 歴史編』一九九八年。

15 同じ美麻の千見では、現在行われていないが、かつて一月七日にヤネアゲルといって、道祖神の石像の上にミズブサの木で屋根を組み、ワラで屋根を葺いて注連縄を張り、米・塩・酒・魚・野菜などをお供えをしたという。そこへ、ウツギやホウの木で男根をつくり供えたという(長野県『長野県史民俗編第四巻二 北信地方 仕事と行事』一九八五年)。

16 牛越嘉人『北安曇の道祖神』柳沢書苑、一九七三年。

17 池田町教育委員会『池田町石造文化財』一九八六年。

18 長野県『長野県史民俗編第四巻二 北信地方 仕事と行事』一九八五年。

19 大きな文字碑の道祖神は祠形や双体像の道祖神碑に比べて後発で、しかも平板状の大きな石に文字だけを彫り込むという簡便さも加わって大型化していく。大型化の背景には大きければ大きいほど、その効力が発揮されるという考え方が横たわっている。小川村の久木においてもコウシャ者の宮嶋隆廣氏(八〇歳)が、地区内の文字碑の道祖神にワラと注連縄で神面をつくっている。

21 生坂村誌編纂委員会『生坂村誌 歴史・民俗編』一九九七年。

22 美麻村誌編纂委員会『美麻村誌 歴史編』二〇〇〇年。

23 横山十四男は「信濃の百姓一揆と義民伝承」(『信濃』三七―八、一九八五年)のなかで「山国とは言っても信濃は、交通が四通八達していたということ、そして山間の畑作物に商品作物が多くつくられ、養蚕・製糸に代表されるような遠隔地取引商品が

産出された」と畑作地帯の優位性を論じている。

24 八坂村誌編纂委員会『八坂村誌 歴史編』一九九三年。

25 池田町誌編纂委員会『池田町誌 歴史編Ⅰ』一九九二年。

26 江戸時代の農書『耕耘録』の「稻刈」の項の「注連の穂」は次のように記す。「年頭ニ産土の神社へ供するを先として、居宅の門荘、庭荘の松竹に掛る料の稲穂云。まづ稲を刈初る時はおのおの吾佃の内ニて禾子の脆からぬ稲のよく登たるを撰て格別ニ刈分、清浄ニ干上て下葉を去、茎を磨きて藁苞ニ包、庭木などに高く結付、雨覆を被けて囲置ものなり」と。

27 宮崎清『藁Ⅰ・Ⅱ』法政大学出版局、一九八五年。

28 過疎とは高度成長期の過程で、労働力の需要がないために起こった人口・世帯の移動によって、地域の人口の持続的、かつ急激な減少が契機となって産業や生活環境面などの地域的諸機能が低下して、地域社会として存続しにくく、あるいは維持できなくなってきた状態をいい、最近ではそのような集落を限界集落と呼ぶようになってきた。

29 田村栄作「二〇世紀後半の長野県の市町村人口変動」(県立歴史館総合情報課会発表資料、二〇〇六年)。

30 移転した住民の生の声は、「山村であっても時代に即応した文化生活もしたい。子供の教育も伸ばしてやりたい。収入も少なく、交通も不便であり、近隣の町へも遠い高地にあっては、等しく文化生活の恩恵に浴することも困難である。(中略)年々一人離れ、二人出、そしてついに部落全体が転住の状態になった。転住ということが、止むに止まれぬ宿命みたいなものであった。また、『出ていけばなんとかなる』『人も出るから』『嫁のきてもない』『雪掻きや道ぶしんの苦勞が多い』と書いている(美麻村高地区『高地の歩み』一九八四年)。

31 こうした中で相互扶助社会が基本であった農村の農民の意識が変化していく様子の高地分校に勤めていた教師は、「昭和三十九年バスが開通した。そんな感動の中で区民の町への流出が急激に始まる動きが、高地を大きく揺るがし始めていた。(中略)殆どの区民はみな山の畑よりも、工事仕事に出かけていった。」「転出が始まり浮き足だつてくると、自分だけが取り残されてはならないという不安から、村の支え合い面に奉仕反対、協力ごめんの風潮が生まれ、分校や公民館活動への意欲が衰え、あつという間に社会崩壊が始まった」と書いている(美麻南小学校高地分校『高地分校沿革誌』一

九六九年)。

32 日本の高度経済成長は一般的には昭和三〇年(一九五五)から昭和四八年(一九七三)秋の第一次石油ショックまでをいい、この間の実質経済成長率は年率九・三割で、戦前の日本はもちろん、第二次大戦後に高度成長を記録した西欧諸国を上回る成長率であった(浅井良夫「現代資本主義と高度成長」『日本史講座』一〇、二〇〇五年)。

33 機械化の過程はまず耕耘機が一九六〇～六五年、動力防除機が一九六五年前後、刈り取り用のバインダー・コンバインが一九六〇年代の後半から七〇年代前半、そして最後に田植機が一九七〇年代の前半から普及するようになった。

34 加瀬和俊「農村と地域の変貌」『日本史講座』一〇、二〇〇五年。

35 昭和三〇年(一九五五)の農業世帯員の全世帯員に占める割合は四二・一割であったものが、昭和四五年(一九七〇)には二六・八割で、一五年間で一五割も減少した。高度成長以前の農村では、家としてまとまって労働することが至上命令とされた家父長制的家族協業制であったが、それは成長後には姿を消した(注34と同じ)。

36 この背景には国の第一次産業の衰退に伴う農山村への投資の比重の低下、農業と他産業との所得格差が広がり、治山・治水を中心とする国土保全の軽視、都市中心型の文化政策、広域行政権のもとで自治機能が低下したことも見逃せない。

37 戦時中は門松の松を伐ることも禁止され、印刷物で松飾りの代用をしたが、これが自然保護の観点から昭和三〇年代に一部で復活したことがある。

38 生坂村の大倉では一月一四日に当番の家にワラを持って集まり、縄をなうもの、俵を編むもの、幣束を切るものなどに手分けして作り、できあがると道祖神の近くに長さ五間(一〇坪)の杉の紙御幣の竿にかけて大倉で栽培が盛んであったタバコの葉をかたどって飾り付ける。一五～一六日と飾って一七日の朝、くじ引きによって福俵を分ける。くじに当たり福俵をもらった家ではお神酒を供える。大俵は一升、中俵は五合、小俵は三合、幣束各一合、二本で二合、合計二升のお神酒をその場でくみかわして終わる祭りであるが昭和一八年頃紙がなくなり中止したままになっていた。なおこの紙御幣は安曇野から松本平にみられる穂高倉平、豊科新田、堀金田尻、梓川横沢中区、塩尻市南内田などの「御柱」と類似している。

参考文献(注にあげたもののぞく)

橋浦泰雄編 一九三一『東筑摩郡道祖圖繪』(郷土研究社)。

- 信濃教育会北安曇部会 一九三一『北安曇郡郷土誌稿第三輯』。
 南安曇郡誌改訂編纂会 一九六八『南安曇郡誌 第二巻下』。
 宮下健司 一九八四「村落の空間構造と世界観」『信濃』三六一。
 北信地区農協生活指導員部会 一九八〇『北信濃の冠婚葬祭』(銀河書房)。
 大町市史編纂委員会 一九八四『大町市史 第五巻 民俗・観光』。
 白馬村教育委員会 一九八四『白馬の石仏』。
 山口通之 一九八五「長野県における過疎について」『信濃』三七—三。
 明科町教育委員会 一九八六『明科の石造文化財』。
 長野県 一九八九『長野県史民俗編第三巻二 中信地方 仕事と行事』。
 信州新町教育委員会 一九八九『信州新町の石造文化財』。
 鬼無里村教育委員会 一九九四『鬼無里の石仏』。
 美麻村教育委員会 一九九七『長野県宝 中村家住宅修理工事報告書』。
 塚田章二郎 一九九七「日本農業・農村の再生の可能性」『経済地理学年報』四三—四。
 生坂村誌編纂委員会 一九九九『生坂村誌 文化財編』。
 美麻村誌編纂委員会 一九九九『美麻村誌 民俗編』。
 古川貞雄 二〇〇〇「松代藩山中代かき馬と領内牛馬数」『長野』二二一。
 小川村教育委員会 二〇〇一『小川村の石造文化財』。
 宮下健司 二〇〇二「道祖神祭りと火祭り」『火祭り』(鬼灯書籍)。
 宮下健司 二〇〇二「棚田の田づくりと耕作放棄—長野県飯山市富倉の事例を通して—」
 『棚田学会誌 日本原風景・棚田』(棚田学会)。
 市河俊和 二〇〇三『アルプスを眺める仏たち』。
 宮下健司 二〇〇四『野沢の火祭り』から地域を考える『信濃教育』一四〇六。
 東川手の歴史を語る会 二〇〇五『うるわしきふるさと東川手』。
 宮下健司 二〇〇六「善光寺道四〇〇年—人とモノが行き交った祈りの道」『筑北郷土
 史研究会誌』五。
 宮下健司 二〇〇六「土偶と道祖神に込められた祈りと願い」『松本市立博物館一〇〇
 周年・松本市立考古博物館二〇周年記念特別展図録—祈りと偶像』。
 宮下健司 二〇〇六「慶師のデイドーボー」『館報おおか』六。
 宮下健司 二〇〇七「稲作をめぐる信仰と祭り」『ちょうま』二七。

学芸研究会

一月二五日

大竹 憲昭

竹佐中原遺跡と日本先土器時代文化の研究

黒岩 龍也

歴史館が学校から期待されていること

―歴史館アンケートの結果より―

二月二八日

滝澤 正幸

川上冬崖・小山正太郎と北海道

―「北海道茅部嶺之図」

及び「北海道アイヌ人之図」について―

福島 正樹

(長野県教育委員会文化財生涯学習チーム)

みんなの信州遺産

―信州文化遺産保全中長期計画(案)について―

五月三一日

村石 正行

北信濃における南北朝内乱史

田村 栄作

長野県への学童集団疎開

六月二九日

水沢 教子

屋代遺跡群出土土器に見る「在地胎土」

―縄文中期から平安後期に至る

土器群の胎土分析を通じて―

中條 昭雄

福島安正 ―単騎シベリア横断の男―

七月二六日

谷 和隆

神子柴文化と土器の出現

川崎 保

縄文時代軟玉製品の起源と変遷

八月三〇日

小柳 義男

芋川氏の出自

唐澤 敏

生涯学習社会の形成と開かれた歴史館について

九月二七日

児玉 卓文

足利三代木像梟首事件とその周辺

宮下 健司

戸隠からみた飯縄・秋葉信仰

一〇月二六日

黒岩 龍也

夜間瀬川水系八ヶ郷用水の歴史

大竹 憲昭

長野県における先土器時代研究の歩み

十一月二九日

前澤 健

狂犬病の侵入とその情報

―元文二・三年信濃国伊那郡を事例に―

ユニバーサルミュージアムをめざして

十二月二〇日

福島 正樹

みんなの宝を守ろう ―長野県の文化財保護行政―

森山 俊一

『諸国道中商人鑑 中山道・善光寺之部 全』について
の一考察